

第2節

中学生の学習観・成績観・社会観

1. 成績観

① 成績の自己評価

成績の自己評価は、「真ん中」とその前後のカテゴリに6割近くが集中している。教科別での成績の自己評価では「国語」で3割近くが「真ん中」としているが、「英語」は半数近くが「真ん中」よりも「下位」と自己評価している。

Q あなたの学校での成績についてうかがいます。
 ●現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか。
 ●次の教科(数学、国語、英語)の現在の成績は、学年の中でどのくらいですか。

まず「学年の中での総合的な成績(以下、成績の自己評価)」の時系列での変化を図2-2-1に示した。選択肢は「1(上のほう)」から「4(真ん中)」を経て「7(下のほう)」まで7段階に分け、いずれかの段階を自己評価にもとづき選択させた。第1回から第4回まで構成比に大きな変化はみられなかったが、第3回から第4回にかけて「7」が3.4ポイントと若干ではあるが増加している。

なお図には示していないが、性別による成績の自己評価では違いはみられなかった。

成績の自己評価を教科別に図2-2-2で示した。「国語」では「4」27.7%が最頻値であり、他の「数学」「英語」に比べ高い比率を示している。また「下位」(「5」「6」「7」、以下同)を教科ごとに見ると、「国語」が39.2%、「数学」が41.0%、「英語」が44.9%であり、「英語」に関してはほぼ半数近くが「下位」

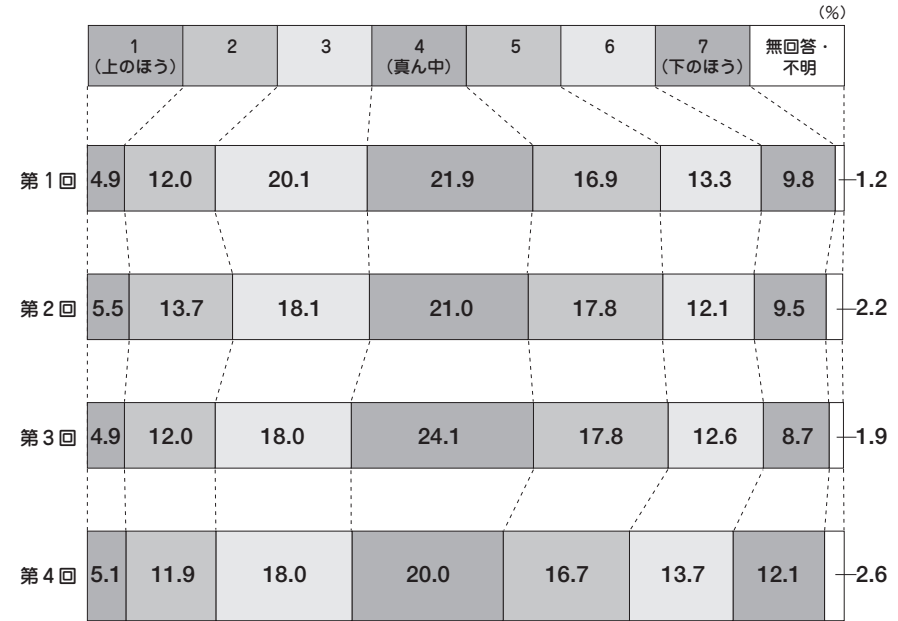
に位置づけていることがわかる。

さらに教科別の成績の自己評価と、成績の自己評価の「上位」(「1」「2」「3」)、「中位」(「4」)、「下位」でのクロス集計を表2-2-1に示した。まず「国語」では、成績の自己評価別で最頻値が上位層で「3」、中位層で「4」、下位層が「5」であり、いずれの層も「中位」に偏っていることがわかる。とくに中位層では「4」が半数を超えているのが特徴である。

一方、「数学」「英語」では最頻値が上位層で「2」、中位層で「4」、下位層が「7」であり、「国語」とは異なり上位層・下位層は「真ん中」から分散する傾向がみられた。

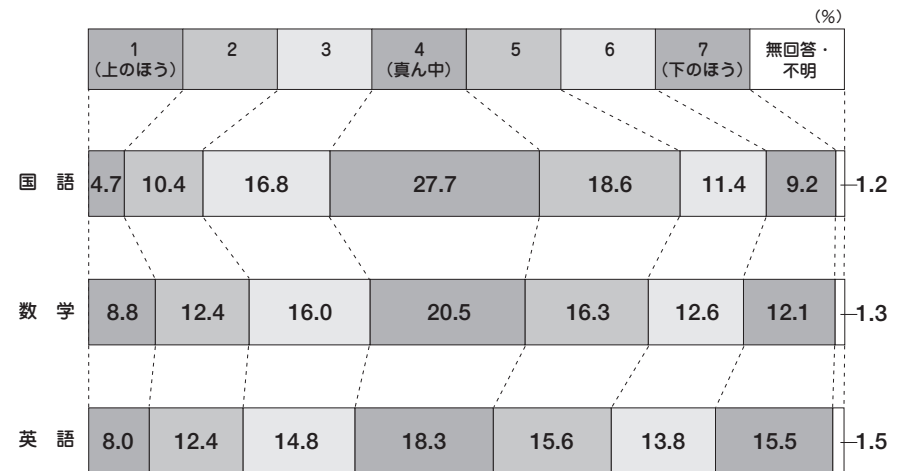
これらのことから、「数学」または「英語」の成績の自己評価が総合的な成績の自己評価に影響している可能性が考えられる。

図2-2-1 成績の自己評価(時系列)



注) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

図2-2-2 教科別の成績の自己評価



注) サンプル数は2,371名。

表2-2-1 教科別の成績の自己評価(成績の自己評価別)

| | | (%) | | |
|-----|----------|-------------|-------------|---------------|
| | | 上位 (828) | 中位 (475) | 下位 (1,006) |
| 国 語 | 1 (上のほう) | 12.2 | 1.5 | 0.3 |
| | 2 | 26.7 | 3.2 | 0.5 |
| | 3 | 30.0 | 18.3 | 5.6 |
| | 4 (真ん中) | 23.4 | 50.3 | 21.3 |
| | 5 | 6.0 | 21.7 | 27.8 |
| | 6 | 0.7 | 3.8 | 23.7 |
| | 7 (下のほう) | 0.5 | 1.1 | 20.3 |
| 数 学 | 1 (上のほう) | 22.2 | 2.9 | 0.7 |
| | 2 | 29.0 | 5.7 | 2.2 |
| | 3 | 27.4 | 20.6 | 4.9 |
| | 4 (真ん中) | 14.3 | 42.9 | 15.7 |
| | 5 | 5.1 | 22.1 | 23.1 |
| | 6 | 1.4 | 4.2 | 25.5 |
| | 7 (下のほう) | 0.1 | 1.1 | 27.2 |
| 英 語 | 1 (上のほう) | 20.3 | 1.9 | 1.1 |
| | 2 | 27.8 | 8.2 | 2.0 |
| | 3 | 26.0 | 17.7 | 4.5 |
| | 4 (真ん中) | 16.8 | 38.3 | 10.6 |
| | 5 | 5.9 | 24.4 | 19.7 |
| | 6 | 1.6 | 6.3 | 27.8 |
| | 7 (下のほう) | 1.0 | 2.9 | 33.6 |

注1) 教科別に「上位」「中位」「下位」での最頻値に○をつけた。
 注2) 無回答・不明は省略した。
 注3) ()内はサンプル数。

② とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績

とりたいと思う成績は、「上位」にほぼ8割が集中し、「よい成績をとりたい」という希望は高い。またがんばればとれると思う成績でも、8割近い中学生が「上位」をとれると考えている。

Q | ●あなたはどのくらいの成績がとれたらいいと思いますか。
 ●現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

中学生はどのくらいの成績がとれたらいいと考えているのか、また「うんとがんばれば」どのくらいの成績がとれると考えているのだろうか。ここでは「どのくらいの成績がとれたらよいか(以下、とりたいと思う成績)」と「現在の成績は別として、うんとがんばればとれると思う成績(以下、がんばればとれると思う成績)」についてみてみよう。

とりたいと思う成績とがんばればとれると思う成績の時系列での変化を、表2-2-2に示した。とりたいと思う成績は、第1回から第4回まで「上位」(「1(上のほう)」「2」「3」、以下同)が8割前後と、その比率はほぼ一定である。また、がんばればとれると思う成績でも、第1回から第4回を通じて、8割近くの中学生在「上位」と回答している。いずれも「上位」が多く、全体として大きな変化がみられないのが特徴である。

つづいて第4回について、現在の成績の自己評価、とりたいと思う成績、がんばればとれると思う成績の分布状況を図2-2-3に示した。これによると、とりたいと思う成績とがんばればとれると思う成績は、「上位」に集中していることが確認できる。このことは、ほとんどの中学生が「上位」を望んでおり、またその能力があると考えていることがうかがえる。

そこで現在の成績の自己評価と、とりたい

と思う成績とがんばればとれると思う成績との関係を検証しよう。

まず表2-2-3に成績の自己評価ととりたいと思う成績のクロス集計を示し、成績の自己評価のそれぞれでの最頻値に○をつけた。さらに成績の自己評価ととりたいと思う成績が同じ区分のところにアミをかけている。まず成績の自己評価が「1」「2」の層では、「1」を8割以上が希望している。また成績の自己評価が「4(真ん中)」～「7(下のほう)」の層では、現在の自己評価よりも2～3段階上を希望する比率が高い。結果として「下位」(「5」「6」「7」と自己評価している中学生の半数以上は、「3」「4」を希望していることがわかる。

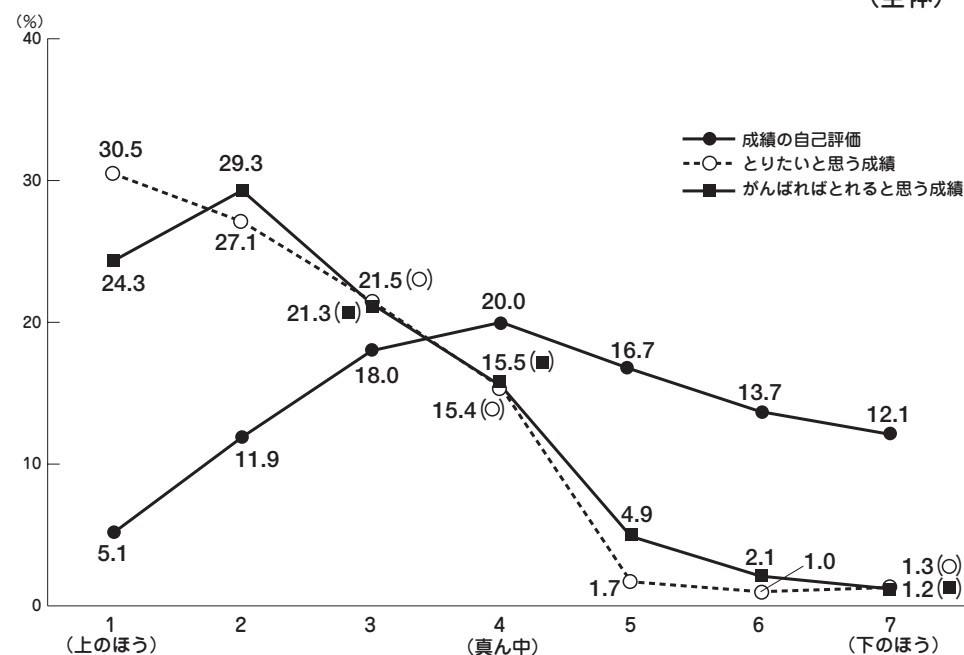
同様に表2-2-4で成績の自己評価とがんばればとれると思う成績のクロス集計を示した。表2-2-3(成績の自己評価ととりたいと思う成績のクロス集計)で確認した傾向と同様の傾向が読み取れる。しかし成績の自己評価で「7」とした中学生に注目すると、「5」以下が42.5%を占めている。とりたいと思う成績での「5」以下の比率は20.6%であったことを考えると、総合的な成績で「7」と自己評価している中学生は、学年で真ん中くらいの成績を希望しているものの、うんと努力してもそこまでは至らないといった意識を持ち合わせていることがうかがえる。

表2-2-2 とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績(時系列)

| | | (%) | | | |
|---------------|---------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| | | 第1回 (2,544) | 第2回 (2,755) | 第3回 (2,503) | 第4回 (2,371) |
| とりたいと思う成績 | 1(上のほう) | 30.4 | 34.8 | 31.8 | 30.5 |
| | 2 | 27.1 | 23.8 | 30.2 | 27.1 |
| | 3 | 21.3 | 22.1 | 20.7 | 21.5 |
| | 4(真ん中) | 16.7 | 15.0 | 13.7 | 15.4 |
| | 5 | 1.9 | 2.0 | 1.0 | 1.7 |
| | 6 | 1.0 | 0.6 | 1.0 | 1.0 |
| | 7(下のほう) | 0.8 | 0.8 | 0.7 | 1.3 |
| がんばればとれると思う成績 | 1(上のほう) | 22.8 | 25.8 | 23.3 | 24.3 |
| | 2 | 28.3 | 27.9 | 31.4 | 29.3 |
| | 3 | 23.8 | 22.1 | 23.9 | 21.3 |
| | 4(真ん中) | 16.3 | 15.6 | 15.2 | 15.5 |
| | 5 | 5.4 | 4.6 | 3.4 | 4.9 |
| | 6 | 1.5 | 1.7 | 1.1 | 2.1 |
| | 7(下のほう) | 0.7 | 0.6 | 0.6 | 1.2 |

注1) 無回答・不明は省略した。
注2) () 内はサンプル数。

図2-2-3 成績の自己評価・とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績(全体)



注1) 無回答・不明は省略した。
注2) サンプル数は2,371名。

表2-2-3 とりたいと思う成績(成績の自己評価別)

| | | (%) | | | | | | |
|-----------|---------|-------------|------|------|------------|------|------|-------------|
| | | 成績の自己評価 | | | | | | |
| | | 1 (上のほう) | 2 | 3 | 4 (真ん中) | 5 | 6 | 7 (下のほう) |
| とりたいと思う成績 | 1(上のほう) | 95.0 | 79.7 | 40.6 | 20.0 | 11.6 | 8.0 | 10.8 |
| | 2 | 3.3 | 17.1 | 53.1 | 41.5 | 24.6 | 12.7 | 7.3 |
| | 3 | 1.7 | 1.4 | 4.2 | 30.1 | 44.8 | 31.5 | 18.5 |
| | 4(真ん中) | 0.0 | 1.4 | 1.4 | 6.7 | 14.9 | 39.2 | 42.5 |
| | 5 | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.4 | 1.0 | 4.0 | 7.0 |
| | 6 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.4 | 0.5 | 2.5 | 3.8 |
| | 7(下のほう) | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.0 | 0.9 | 9.8 |

注1) 無回答・不明は省略した。
注2) 成績の自己評価別での最頻値に○をつけた。
注3) 成績の自己評価ととりたいと思う成績の同じ区分にアミをかけている。
注4) サンプル数は2,371名。

表2-2-4 がんばればとれると思う成績(成績の自己評価別)

| | | (%) | | | | | | |
|---------------|---------|-------------|------|------|------------|------|------|-------------|
| | | 成績の自己評価 | | | | | | |
| | | 1 (上のほう) | 2 | 3 | 4 (真ん中) | 5 | 6 | 7 (下のほう) |
| がんばればとれると思う成績 | 1(上のほう) | 98.3 | 82.2 | 28.2 | 11.4 | 3.8 | 2.8 | 6.6 |
| | 2 | 0.8 | 16.4 | 66.9 | 45.7 | 23.3 | 9.6 | 3.5 |
| | 3 | 0.0 | 0.4 | 3.8 | 35.2 | 44.6 | 26.9 | 15.7 |
| | 4(真ん中) | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 5.3 | 24.8 | 44.4 | 30.7 |
| | 5 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.4 | 1.5 | 12.7 | 22.0 |
| | 6 | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.4 | 1.0 | 1.2 | 13.2 |
| | 7(下のほう) | 0.0 | 0.0 | 0.2 | 0.2 | 0.0 | 1.5 | 7.3 |

注1) 無回答・不明は省略した。
注2) 成績の自己評価別での最頻値に○をつけた。
注3) 成績の自己評価とがんばればとれると思う成績の同じ区分にアミをかけている。
注4) サンプル数は2,371名。

③ 成績観・学力観

時系列でみると「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい(ふつうの生活志向)」が第1回から一貫して高く、第4回では6割を占める。また「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい(名門高校・大学志向)」も6割を占めている。ただし成績上位層は現状以上の成績を望んでおり、逆に下位層はある程度の成績を望んではいないものの、学校生活を楽しく過ごしたいという傾向がみられる。

Q | あなたは、次のように思うことがありますか。

中学生の大半は、とりたいと思う成績、がんばればとれると思う成績ともに「中位」以上の成績と考えていることはすでに述べた。

さらに中学生が成績や学力をどのように考えているのかについて、時系列での変化を図2-2-4に示した。「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい(以下、ふつうの生活志向)」が第1回から一貫して高く、第4回では63.9%と最も多く回答している。「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい(以下、名門高校・大学志向)」でも、第2回・第3回で6割を若干下回っていたが、第4回では61.9%が回答している。

この2項目に続くのは、「どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい(以下、ともかく合格志向)」で、第2回以降増加しており、第4回ではほぼ半数近くが回答している。「学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない(以下、学校生活エンジョイ志向)」は第4回で29.1%、「今は勉強することが一番大切なことだ」は29.5%で、ともに第1回から第4回まで3割前後と、変動は大きくない。

なお「そんなに勉強しなくても、なんとか大学に進学できるだろう」は第4回では7.2%にとどまっている。これは第2回・第3回では「そんなに勉強しなくても、なんとか進学

できるだろう」とたずねていた。この際の「進学」先は高校・専門学校なども含めて広くとらえられるが、今回より「大学」に限定したことが比率の低下に影響したと考えられる。大学全入時代を迎えつつある今日でも、大学に入ることに難しさを感じている中学生が多い様子が見えてくる。

つづいて成績観・学力観の性別での違いを表2-2-5に示した。性別で顕著な差がみられたのは「ともかく合格志向」であり、女子のほうが高かった(男子44.0%<女子55.2%)。

また成績の自己評価別での成績観・学力観の違いを表2-2-6に示した。上位層の中学生ほど「名門高校・大学志向」の比率が高く、逆に「ふつうの生活志向」「学校生活エンジョイ志向」「ともかく合格志向」の比率は低くなる傾向がみられる。

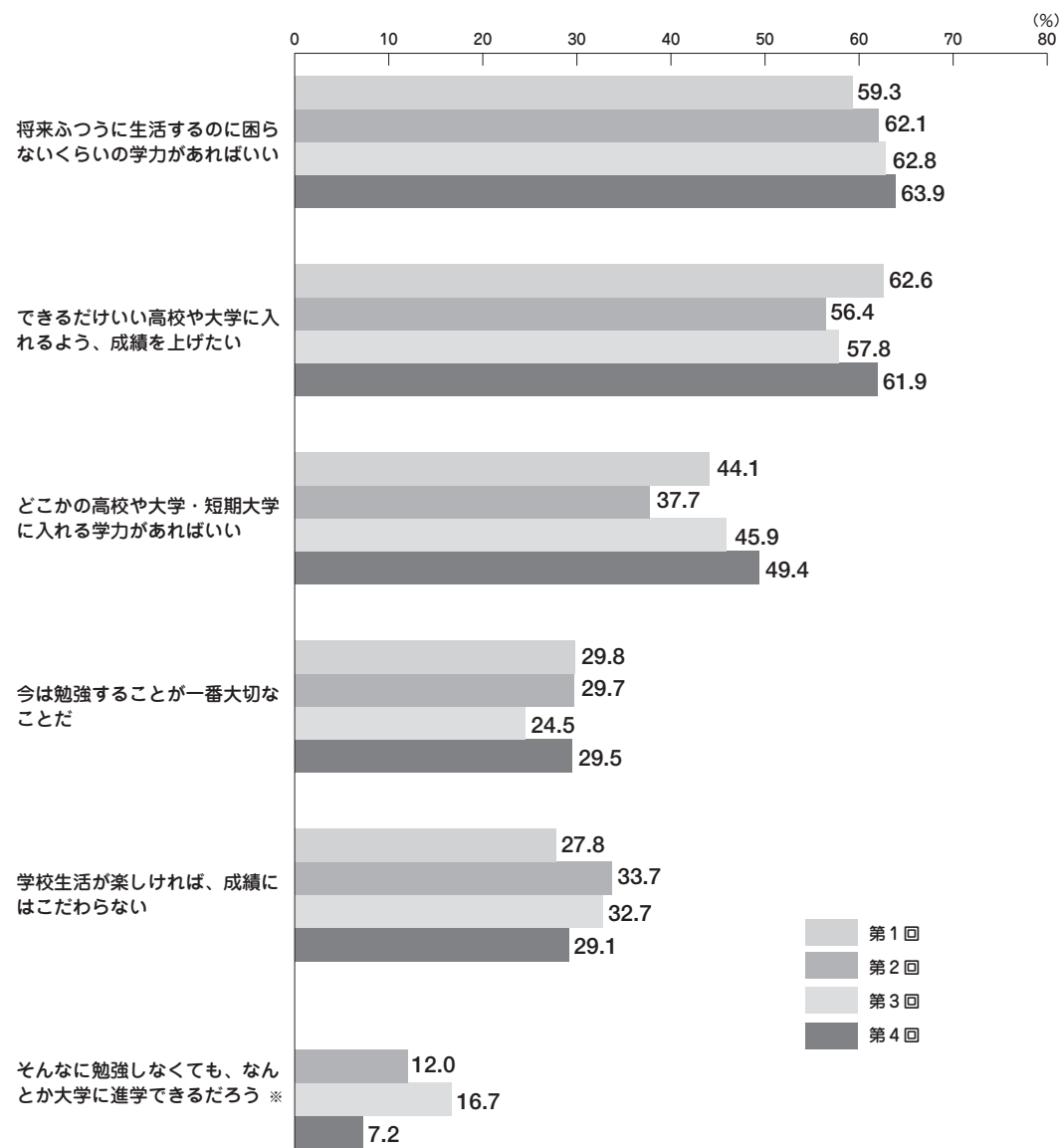
とくに上位層と中位層・下位層との間での差が顕著であったのが、「ふつうの生活志向」(上位52.8%、中位67.8%、下位71.3%、以下同)と、「ともかく合格志向」(41.1%、53.9%、54.4%)であった。また上位層・中位層と下位層との間での差が大きかったのが「学校生活エンジョイ志向」(21.0%、26.3%、37.2%)であった。

これらのことから、上位層は現状以上の成績を望んでおり、またそのためには楽しい学校生活を多少なりとも犠牲にしているという

傾向がうかがえ、逆に下位層はある程度の成績を望んではいないものの、学校生活を楽しく

過ごしたいという傾向がうかがえる。

図2-2-4 成績観・学力観(時系列)



注1) 複数回答。
 注2) *は第1回に該当項目なし。また第2回・第3回は「そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう」。
 注3) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

表2-2-5 成績観・学力観(性別)

| | (%) | |
|------------------------------|---------------|---------------|
| | 男子 (1,210) | 女子 (1,151) |
| 将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい | 63.6 | 64.1 |
| どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい | 44.0 << | 55.2 |
| できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい | 61.7 | 62.2 |
| 学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない | 27.8 | 30.6 |
| 今は勉強することが一番大切なことだ | 29.8 | 29.2 |
| そんなに勉強しなくても、なんとか大学に進学できるだろう | 8.1 | 6.3 |

注1) 複数回答。
 注2) <<>は10ポイント以上差があるもの。
 注3) ()内はサンプル数。

表2-2-6 成績観・学力観(成績の自己評価別)

| | (%) | | | |
|------------------------------|-------------|-------------|---------------|--|
| | 上位 (828) | 中位 (475) | 下位 (1,006) | |
| 将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい | 52.8 << | 67.8 | 71.3 | |
| どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい | 41.1 << | 53.9 | 54.4 | |
| できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい | 69.8 > | 63.2 > | 55.2 | |
| 学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない | 21.0 < | 26.3 << | 37.2 | |
| 今は勉強することが一番大切なことだ | 31.4 > | 26.1 | 29.6 | |
| そんなに勉強しなくても、なんとか大学に進学できるだろう | 7.4 | 8.0 | 6.9 | |

注1) 複数回答。
 注2) <<>は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。
 注3) ()内はサンプル数。

2. 学習していて感じること

自然や社会のしくみについて、5～7割の中学生が「すばらしい」「ふしぎだな」と感じるが、調べたり考えたりすることが好きな中学生は4～5割にとどまる。男子は社会や自然のしくみ、女子は人とのかかわり方への関心が高い。

Q | あなたは勉強していて、次のように感じるがありますか。

教科の学習は、自然や社会に対する興味・関心を高めたり理解を深めたりしていくきっかけとなるものだ。そこで、中学生が学習をしているときに、「すばらしい」「ふしぎだな」とか、調べたり考えたりするのが好きだと感じた経験があるかどうかをたずねた。

はじめに図2-2-5から全体の傾向をみてみよう。「よくある」と「時々ある」の合計(以下同)がもっとも多いのは「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」(71.4%)で、「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う」(63.3%)、「社会のしくみや歴史のできごとを『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」(57.2%)と続く。一方、「英語を使って外国の人と話したり、手紙を書いたりしてみたい」(41.5%)、「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」(41.6%)、「社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ」(43.5%)と感じた経験は少ない。

自然や社会のしくみについて、5～7割ほどの中学生が「すばらしい」「ふしぎだな」と感じるのに対して、調べたり考えたりすることが好きな中学生は4～5割にとどまっている。学習の際に感じる知的感動と調べたり考えたりすることとは、必ずしも結びついていないようだ。

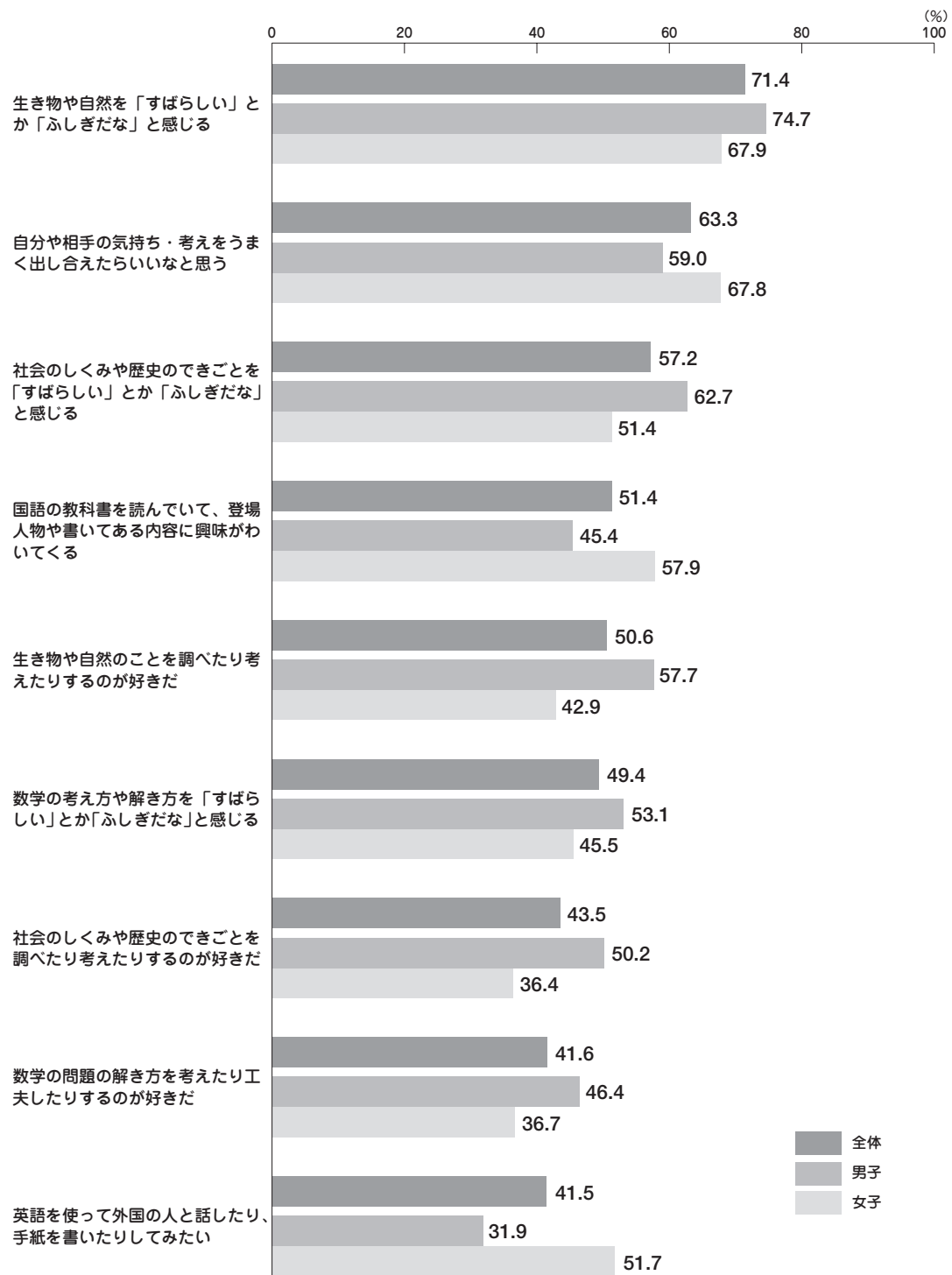
「総合的な学習の時間」は、自分で見つけた課題や興味・関心をもったことについて、

自分で調べたり考えたりする力をつけることが目標とされて、現行の学習指導要領から導入された。その効果を確かめるために、生き物や自然に対して感じることを例にとり、「総合的な学習の時間」の「とても好き」な中学生と「嫌い」(「まあ嫌い」+「とても嫌い」)の%、以下同)な中学生で違いがあるかどうかをみてみよう。

図2-2-6は、生き物や自然に対して「『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」「調べたり考えたりするのが好きだ」とたずねた質問に「ある」(「よくある」+「時々ある」、以下同)と回答した比率を示したものである。「『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」のは、「総合的な学習の時間」が「とても好き」な中学生では82.5%なのに対して、「嫌い」な中学生では57.7%にとどまる。また、「調べたり考えたりするのが好きだ」は「とても好き」な中学生では65.9%なのに対して、「嫌い」な中学生では42.6%である。「総合的な学習の時間」を好きな中学生のほうが、学習の際に知的感動を経験したり、調べたり考えたりすることがわかる。昨今、このような力を身につけることが求められているのだから、国社数理英といった教科の学習と合わせて、より多くの中学生に「総合的な学習の時間」を好きになってもらえるような授業の工夫が求められる。

次に、各教科の好みや理解度などにみられる性差が、学習の際に感じることにみられ

図2-2-5 学習していて感じる事(全体・性別)



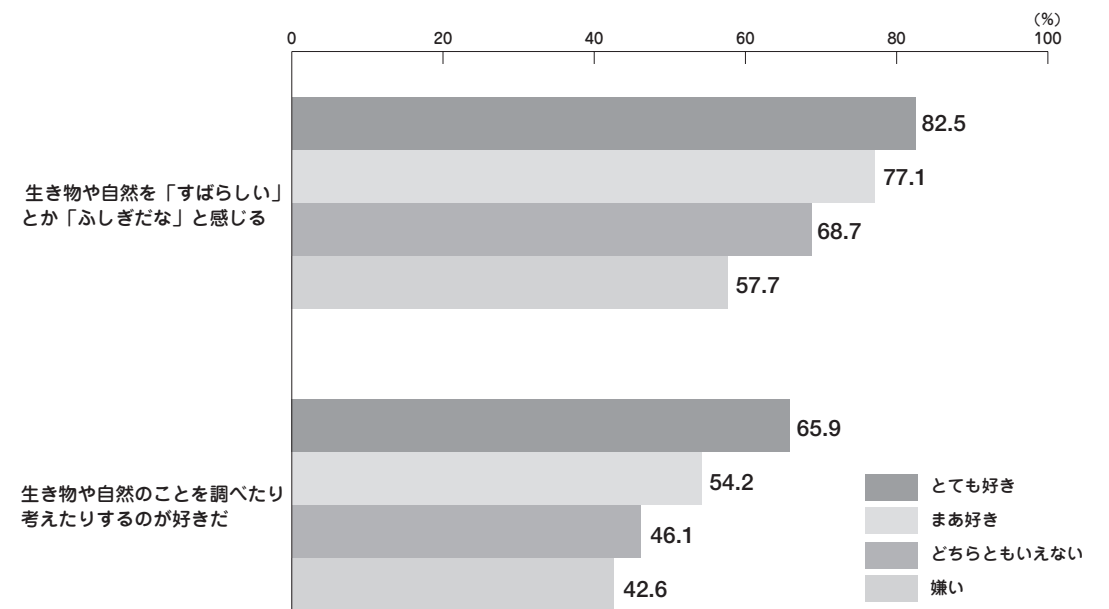
注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。
注2) サンプル数は全体2,371名、男子1,210名、女子1,151名。

るかどうかを、再び図2-2-5からみていこう。男子は「社会のしくみや歴史のできごとを『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」「生き物や自然のことを調べたり考えたりするのが好きだ」「社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ」「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」と感じる比率が高い。一方、女子は「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う」「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる」「英語を使って外

国の人と話したり、手紙を書いたりしてみたい」が高い。男子は社会や自然のしくみに、女子は人とかかわり方にと、学習の際に感じることに性差がみられる。

最後に、第3回までの調査結果と比較したところ、目立った変化はみられなかった(巻末基礎集計表参照)。この間に学習指導要領が改訂され、そこで示された学力観も変わってきているのだが、指導内容や方法の変化は、中学生が学習の際に感じることに影響を及ぼすところまでは至っていないと考えられる。

図2-2-6 学習していて感じる事(「総合的な学習の時間」の好き嫌い別)



注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。
注2) 「総合的な学習の時間」の「嫌い」は「まあ嫌い」「とても嫌い」と回答した人。「とても嫌い」は143名と少なく、属性の偏りもみられることから、クロス分析の信頼性を高めるために合計値を使用した。
注3) サンプル数は「とても好き」296名、「まあ好き」700名、「どちらともいえない」949名、「嫌い」373名。

3. 学習上の悩み

学習上の悩みのトップ・ツーは、「どうしても好きになれない科目がある」(72.0%)、「上手な勉強の仕方がわからない」(68.3%)。全体的に悩みは女子に多い。成績差が顕著で、下位層は自身の経験や内面にかかわる悩みを抱えている。

Q | あなたは勉強について、次のように思うことがありますか。

思春期を迎えつつある中学生はさまざまな悩みを抱えているが、学習の過程ではどのような悩みを抱えているのだろうか。15項目からそう思うものを選ぶ複数回答形式でたずねた。

はじめに図2-2-7から全体の傾向をみてみよう。もっとも多い悩みが「どうしても好きになれない科目がある」(72.0%)で約4分の3におよぶ。以下、「上手な勉強の仕方がわからない」(68.3%)、「覚えなければいけないことが多すぎる」(56.9%)、「わかりやすい授業にしてほしい」(51.3%)を、半数以上の中学生が選んでいる。勉強しなければいけないことはわかっているが、なかなかうまくいかないもどかしさが悩みになっているようだ。

一方、「よい参考書や問題集が見つからない」(17.9%)、「先生は成績にこだわりすぎる」(21.0%)、「親の期待が大きすぎる」(23.7%)は、2割前後の中学生しか気にとめていない。親や教師からは学習面でもそれ以外の面でもさまざまな形で干渉されることがあるだろうが、多くの中学生にとって、学習面での干渉は大きな悩みになるほどのストレスにはなっていないようだ。

引き続き図2-2-7から性別にみると、全体的に男子より女子のほうが学習上の悩みを抱えている。「上手な勉強の仕方がわからない」「覚えなければいけないことが多すぎる」「わかりやすい授業にしてほしい」

「努力しても成績が思うように上がらない」「自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う」の5項目を、女子のほうが男子より約10ポイント多く悩みとしてあげている。

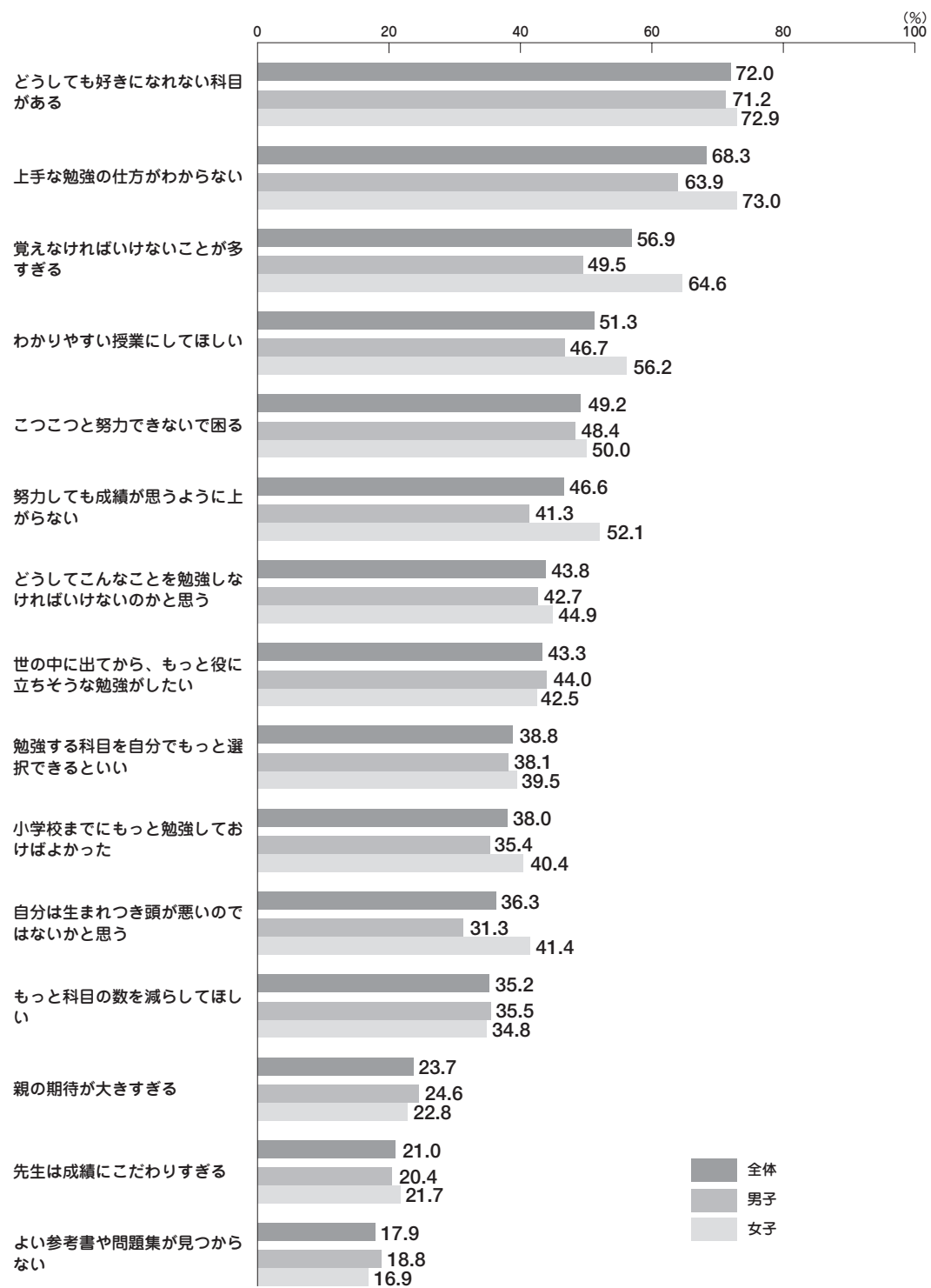
学習上の悩みは、成績の自己評価によって違うのではないだろうか。そこで図2-2-8から上位層と下位層を比べてみよう。顕著な差がみられたのは、「自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う」「小学校までにもっと勉強しておけばよかった」「努力しても成績が思うように上がらない」の3項目で、それぞれ上位層と下位層の間で40.9ポイント、29.8ポイント、28.3ポイントも違っている。他にも多くの項目で10~20ポイント程度の差があるが、顕著な差のある項目に共通するのは、自身の経験や内面にかかわる悩みという点だ。親や教師が、早いうちから勉強の習慣をつけさせたり、学習面以外の評価をしたりすることも必要だろう。

最後に、時系列でみると(図2-2-9)、第3回からは学習の悩みは減少傾向にある。しかし、第1回から第4回を通して減少しているのは、「先生は成績にこだわりすぎる」だけで、「覚えなければいけないことが多すぎる」「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」「勉強する科目を自分でもっと選択できるといい」「もっと科目の数を減らしてほしい」などは、第3回で増加して今回で再び第2回並みに戻ったにすぎない。これらの項目が第3回だけ高いの

は、学習指導要領の移行措置中の調査だったからではないだろうか。つまり、選択学習の幅の拡大や学習内容の精選などは、学習指導要領の改訂によって実施されることになっていたので、「自分たちもそういう学習環境にあればよかったのに」という不満が、このときだけ少し多く出たのではないだろうか。

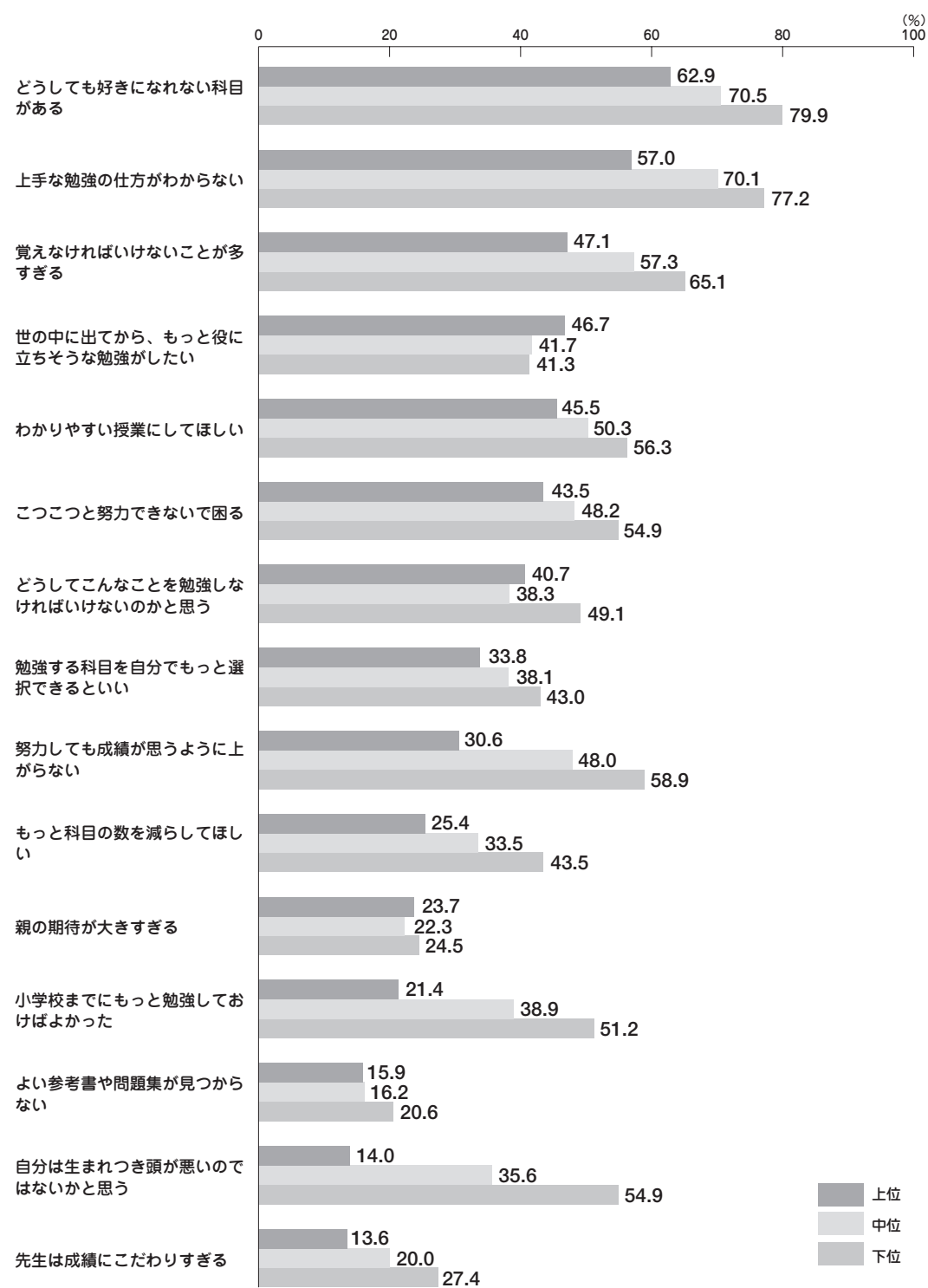
そう考えると、今回の調査で全体に悩みが減っているのは、選択学習の幅の拡大や学習内容の精選といった学習指導要領の改訂の効果だとは考えにくい。むしろ、少子化や高校の学科等の多様化などで高校入試に向けての競争の厳しさが緩んできたことによって、中学生の学習面でのストレスが少なくなってきたからだと考えられよう。

図2-2-7 学習上の悩み(全体・性別)



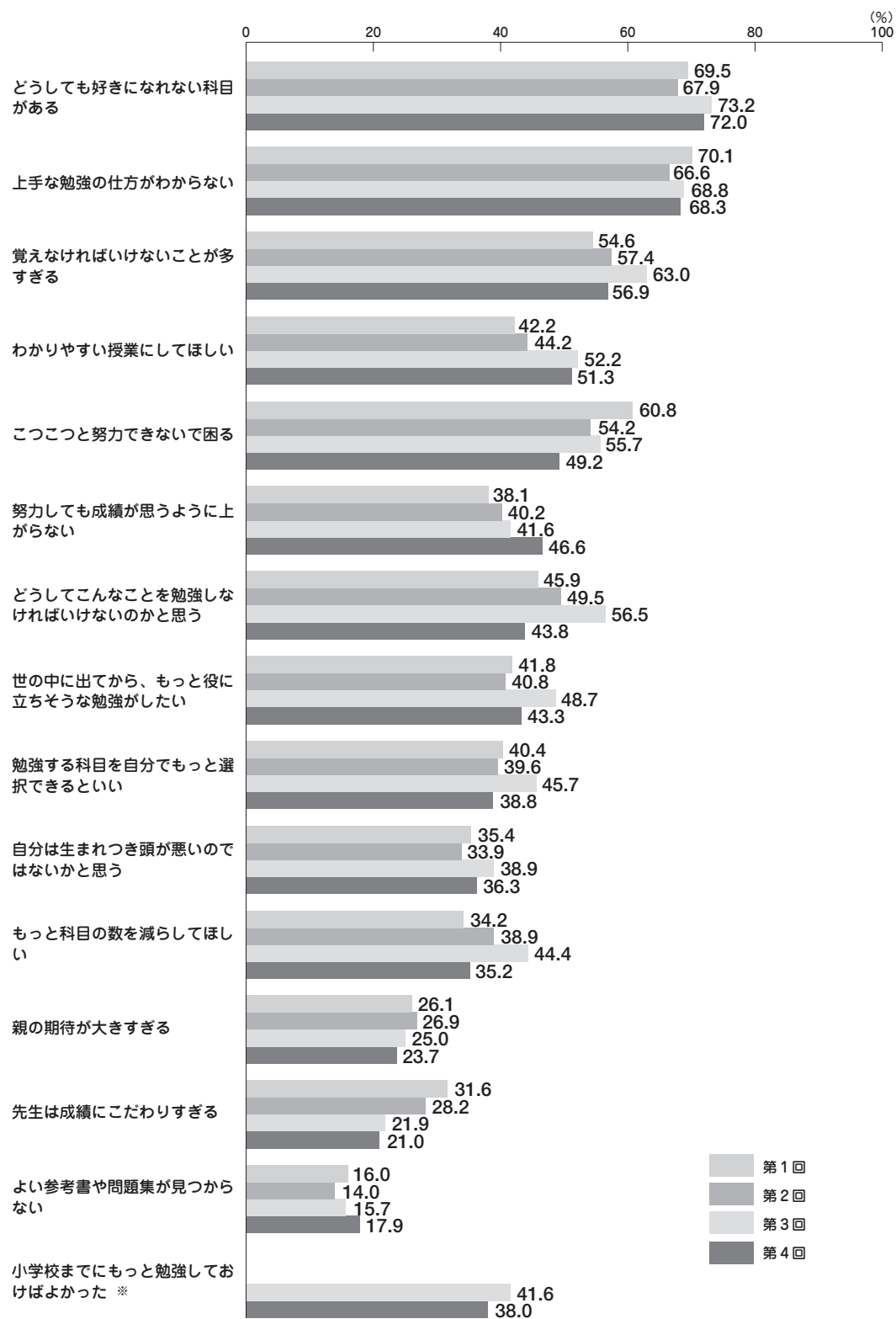
注1) 複数回答。
注2) サンプル数は全体2,371名、男子1,210名、女子1,151名。

図2-2-8 学習上の悩み(成績の自己評価別)



注1) 複数回答。
注2) サンプル数は上位828名、中位475名、下位1,006名。

図2-2-9 学習上の悩み(時系列)



注1) 複数回答。
 注2) ※は第1回・第2回に該当項目なし。
 注3) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。

4. 進路・進学意識

① 高校への進学・希望する進学段階

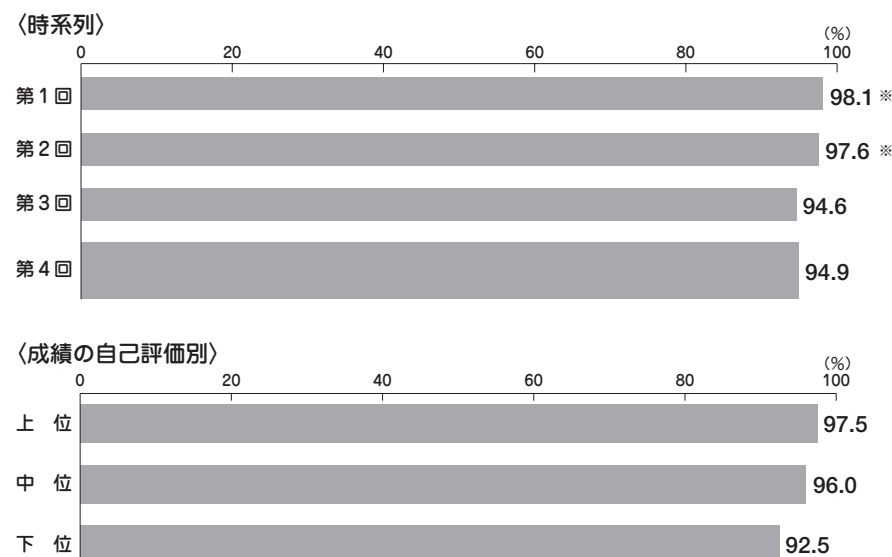
高校進学希望者は全体の94.9%となっており、調査開始の1990年以降、ほぼ一貫して9割を超えている(第1回98.1%→第2回97.6%→第3回94.6%→第4回94.9%)。進学希望者の69.9%が「普通科」を、20.8%が「専門学科」を希望している。

Q あなたは中学卒業後、高校(高等専門学校を含む)に進学したいと思っていますか。
 【思っている人にうかがいます】
 ●どの学科に進学したいですか。
 ●あなたは将来、どの学校まで進みたいですか。

ここでは、まず、中学校卒業後に高校(高等専門学校)に進学を希望するかどうかをたずねている。図2-2-10に示したように、高校進学希望者は全体の94.9%となっており、調査開始の1990年以降、ほぼ一貫して9割を

超えている(第1回98.1%→第2回97.6%→第3回94.6%→第4回94.9%)。図には示していないが、性別、地域別では差はない。成績の自己評価別では、上位97.5%、中位96.0%、下位92.5%と、下位層で若干低くなっている。

図2-2-10 高校への進学希望(時系列・成績の自己評価別)



注1) ※は「あなたは将来、どの学校まで進みたいですか」に対して、「中学校まで」「無回答・不明」以外を回答した合計比率を示している。
 注2) サンプル数は第1回2,544名、第2回2,755名、第3回2,503名、第4回2,371名。上位828名、中位475名、下位1,006名。

次に、高校進学を希望する中学生に限定して、進学したい学科をたずねた結果をみてみよう(表2-2-7)。進学希望者の69.9%が「普通科」を、20.8%が「専門学科(商業科や工業科など)」を希望している。性別や成績の自己評価別、地域別に詳しくみると、希望する学科とこれらの属性との間には強い関連が見い出される。とくに、「専門学科」希望についてみると、性別では、男子23.7%に対して女子17.8%、成績の自己評価別では、上位13.9%に対して下位26.6%、地域別では、大都市13.3%に対して郡部24.2%となっている。

では、希望する進学段階はどのようになっているだろう(表2-2-8)。「高校まで」は第1回22.4%→第2回26.4%→第3回26.8%→第4回24.4%と大きな変化はない。「専門学校・各種学校まで」は第1回から着実にその比率を伸ばしており(第1回14.7%→第2回16.3%→第3回19.7%→第4回21.7%)、第三の進路として定着していることがわかる。

では、高学歴志向はどのような状況にあるだろう。「四年制大学まで」と「大学院まで」

(ただし、第1回は「大学院まで」はない)を合わせた数値をみてみると、第1回39.9%→第2回40.0%→第3回37.1%→第4回36.2%とほぼ横ばいとなっている。大学全入時代を迎えている今日にあっては、高学歴志向の弱まりともいえる傾向ではないだろうか。

性別では、男子のほうが女子より5ポイント以上多くなっているのは「高校まで」(男子30.5%>女子18.2%、以下同)、「四年制大学まで」(34.0%>24.2%)の2項目である。逆に女子のほうが男子より5ポイント以上多くなっているのは「専門学校・各種学校まで」(13.2%<30.2%)と「短期大学まで」(11.0%<18.7%)の2項目である。成績の自己評価との関連はより明瞭に表れており、上位層では「高校まで」9.9%、「四年制大学まで」46.6%となっているのに対して、下位層では、「高校まで」38.0%、「四年制大学まで」14.9%となっている。希望する進学段階は、さらに、父親の学歴とも強い関連を示している。「高校まで」は大卒11.1%<非大卒32.8%、「四年制大学まで」は大卒42.8%>非大卒20.6%となっている。

表2-2-7 希望する学科(全体・性別・成績の自己評価別・地域別)

| | 全体 (2,249) | 性別 | | 成績の自己評価別 | | | 地域別 | | |
|-----------------|---------------|---------------|---------------|-------------|-------------|-------------|--------------|---------------|-------------|
| | | 男子 (1,131) | 女子 (1,111) | 上位 (807) | 中位 (456) | 下位 (931) | 大都市 (678) | 地方都市 (776) | 郡部 (795) |
| | | (%) | | | | | | | |
| 普通科 | 69.9 | 68.2 | 71.6 | 77.9 | 70.8 | 62.3 | 78.3 | 69.6 | 62.9 |
| 専門学科(商業科や工業科など) | 20.8 | 23.7 | 17.8 | 13.9 | 21.5 | 26.6 | 13.3 | 24.0 | 24.2 |
| 総合学科 | 4.3 | 3.4 | 5.2 | 4.1 | 3.7 | 4.7 | 3.5 | 2.7 | 6.5 |
| その他の学科 | 3.7 | 3.4 | 4.0 | 3.0 | 2.9 | 4.9 | 4.1 | 2.4 | 4.7 |
| 無回答・不明 | 1.3 | 1.2 | 1.4 | 1.1 | 1.1 | 1.4 | 0.7 | 1.3 | 1.8 |

注) ()内はサンプル数。

表2-2-8 希望する進学段階(時系列・性別・成績の自己評価別・父親の学歴別)

| | 第1回 (2,524) | 第2回 (2,726) | 第3回 (2,369) | 第4回 (2,249) | 第4回 | | | | | | |
|-------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|---------------|-------------|-------------|-------------|-------------|----------------|
| | | | | | 性別 | | 成績の自己評価別 | | | 父親の学歴別 | |
| | | | | | 男子 (1,131) | 女子 (1,111) | 上位 (807) | 中位 (456) | 下位 (931) | 大卒 (846) | 非大卒 (1,370) |
| 高校まで | 22.4 | 26.4 | 26.8 | 24.4 | 30.5 | 18.2 | 9.9 | 21.7 | 38.0 | 11.1 | 32.8 |
| 専門学校・各種学校まで | 14.7 | 16.3 | 19.7 | 21.7 | 13.2 | 30.2 | 17.3 | 20.8 | 25.7 | 17.3 | 24.8 |
| 短期大学まで | 20.1 | 14.5 | 14.4 | 14.8 | 11.0 | 18.7 | 14.1 | 17.3 | 14.1 | 15.0 | 14.2 |
| 四年制大学まで | 39.9 | 33.1 | 31.7 | 29.1 | 34.0 | 24.2 | 46.6 | 28.5 | 14.9 | 42.8 | 20.6 |
| 大学院まで | — | 6.9 | 5.4 | 7.1 | 8.8 | 5.2 | 9.7 | 7.9 | 4.5 | 10.8 | 4.6 |
| その他 | 1.8 | 1.5 | 1.3 | 1.1 | 0.6 | 1.5 | 1.1 | 1.3 | 1.0 | 1.2 | 1.0 |
| 無回答・不明 | 1.1 | 1.3 | 0.8 | 1.9 | 1.9 | 1.9 | 1.2 | 2.4 | 1.8 | 1.9 | 1.9 |

注1) —は該当項目なし。

注2) 第1回・第2回では回答者全員にたずねており、「中学校まで」という選択肢を設けている。ここでの数値は「中学校まで」と回答したケースを除外して集計したものである。

注3) ()内はサンプル数。

② 希望する高校のタイプ

高校進学希望者が進学したいと考える高校のタイプは、「みんなで楽しめる学校行事が豊富な高校」(61.7%)がもっとも多く、「自分の好きな教科・科目を自由に選択できる高校」(54.5%)、「職業資格を取るのに有利な高校」(53.1%)が続いている。また、第3回で33.4%だった「進学状況のよい高校」は、今回、42.7%となっている。

Q | どのような高校に進学したいですか。

それでは、中学生はどのような高校を希望しているのだろうか(表2-2-9)。9つのタイプを設定して複数回答を求めたところ、「みんなで楽しめる学校行事が豊富な高校」(61.7%)がもっとも多く、「自分の好きな教科・科目を自由に選択できる高校」(54.5%)、「職業資格を取るのに有利な高校」(53.1%)が続いている。第3回で33.4%だった「進学状況のよい高校」は、今回、42.7%となっており、全体的には高校生活そのものを楽しめることを優先する傾向は変わらないものの、将来の進路選択の確実性までを視野に入れて高校のタイプを考慮する方向への変化が表れ始めているといえる。

性別で差が大きい項目をみると、女子で5ポイント以上多くなっているのは「職業

資格を取るのに有利な高校」(男子49.8%<女子56.6%、以下同)、「校則がきびしくない高校」(45.2%<50.3%)、「みんなで楽しめる学校行事が豊富な高校」(54.1%<69.4%)の3項目である。逆に、男子で5ポイント以上多くなっているのは、「部活動のさかんな高校」(51.9%>43.3%)である。

希望する高校のタイプは、成績の自己評価や父親の学歴と密接な関連がある。たとえば、「進学状況のよい高校」を希望するのは、成績の自己評価別では上位54.2%>下位32.5%、父親の学歴別では大卒49.6%>非大卒38.5%、また、「それほど努力しなくても入学できる高校」を希望するのは、上位10.8%<下位32.0%、大卒16.4%<非大卒24.4%である。

表2-2-9 希望する高校のタイプ(時系列・性別・成績の自己評価別・父親の学歴別)

| | 第3回 (2,369) | 第4回 (2,249) | 第4回 (%) | | | | | | | |
|-------------------------|----------------|----------------|---------------|---------------|-------------|-------------|-------------|-------------|----------------|--|
| | | | 性別 | | 成績の自己評価別 | | | 父親の学歴別 | | |
| | | | 男子 (1,131) | 女子 (1,111) | 上位 (807) | 中位 (456) | 下位 (931) | 大卒 (846) | 非大卒 (1,370) | |
| みんなで楽しめる学校行事が豊富な高校 | 62.3 | 61.7 | 54.1 | 69.4 | 60.0 | 64.7 | 61.7 | 61.8 | 61.7 | |
| 自分の好きな教科・科目を自由に選択できる高校 | 58.9 | 54.5 | 52.2 | 56.9 | 49.4 | 54.6 | 59.4 | 52.1 | 55.9 | |
| 職業資格を取るのに有利な高校 | 50.3 | 53.1 | 49.8 | 56.6 | 53.8 | 56.8 | 51.1 | 50.9 | 54.5 | |
| 校則がきびしくない高校 | 51.6 | 47.8 | 45.2 | 50.3 | 43.5 | 46.9 | 51.5 | 44.9 | 49.7 | |
| 部活動のさかんな高校 | 43.9 | 47.6 | 51.9 | 43.3 | 48.6 | 49.6 | 45.8 | 52.2 | 44.9 | |
| 進学状況のよい高校 | 33.4 | 42.7 | 42.8 | 42.7 | 54.2 | 44.3 | 32.5 | 49.6 | 38.5 | |
| 体験的な学習などのカリキュラムに特色のある高校 | 20.3 | 21.9 | 20.3 | 23.6 | 24.4 | 20.4 | 20.7 | 22.0 | 21.8 | |
| それほど努力しなくても入学できる高校 | 20.1 | 21.3 | 20.7 | 21.8 | 10.8 | 17.5 | 32.0 | 16.4 | 24.4 | |
| その他 | 5.4 | 6.3 | 4.7 | 7.9 | 7.1 | 5.7 | 5.7 | 5.9 | 6.5 | |

注1) 複数回答。

注2) ()内はサンプル数。

③ 将来つきたい職業

将来つきたい職業名を具体的に書いてもらったところ、男子でもっとも多いのは、「サラリーマン」4.9%で、「野球選手」4.5%、「サッカー選手」2.4%、「公務員」2.2%が続いている。女子では、「保育士・幼稚園の先生」11.6%、「美容師・理容師」4.8%、「看護師」4.4%、「ケーキ屋さん・パティシエ」4.2%、「薬剤師」「学校の先生」「芸能人」ともに3.2%となっている。

Q | あなたが将来つきたい職業は何ですか。できるだけ具体的に記入してください。

表2-2-10は、将来つきたい職業名を具体的に書いてもらった結果について作成したランキング表である。「無記入(空欄)」「未定」「なし」その他明確な職業名に分類できないものを除外している。男子でもっとも多いのは、「サラリーマン」4.9%で、「野球選手」4.5%、「サッカー選手」2.4%、「公務員」2.2%が続いている。同様にたずねた小学生[※]男子の3割程度がスポーツ選手をあげていたのに対し、「サラリーマン」が第1位となっていることは、小学生に比べて、職業がより現実味を増してイメージできるようになったことの表れ—ある意味では夢をみなくなったこと—かもしれない。ただし、「サラリーマン」は正確には職業名ではなく、仕事の中身へと直結したかたちで認識されているわけではない。「高校や大学卒業後は『サラリーマン』』という、多くのおとなたちが営んでいる生活をモデルにしているという点で、現実的であるといえよう。

他方、女子の希望する職業ランキングをみると、「保育士・幼稚園の先生」11.6%、「美容師・理容師」4.8%、「看護師」4.4%、「ケーキ屋さん・パティシエ」4.2%、「薬剤師」「学校の先生」「芸能人(歌手・声優・お笑い

タレントなど)」ともに3.2%となっている。小学生[※]でも第1位だった「保育士・幼稚園の先生」は、中学生の女子でも第1位である。そして、「保育士・幼稚園の先生」「美容師・理容師」「看護師」をはじめとして、資格取得によってつくことのできる職業—「手に職」系—を希望していることから、男子に比べて、仕事の中身に直結したかたちで、より現実的で確実な選択を目指していることがうかがえる。なお、このランキング表に示される職業(もっとも多く選択された職業上位20種類)を選択する子どもの比率は、小学生[※]の場合、男子57.8%、女子65.6%であったのに対し、中学生では、男子36.4%、女子51.9%と少なくなっている点は興味深い。職業世界への関心が学校段階を上がることによって多様化する側面(現実社会へより近づくことによって、社会には多くの職業があることを認識する)とともに、現在進められている「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度を育てる」キャリア教育によって、多様化している側面もあると考えられる。

表2-2-10 将来つきたい職業のランキング(性別)

| 男子 | | % |
|----|-------------------------|------------|
| 1 | サラリーマン | 4.9 (59) |
| 2 | 野球選手 | 4.5 (55) |
| 3 | サッカー選手 | 2.4 (29) |
| 4 | 公務員 | 2.2 (27) |
| 5 | 学校の先生 | 2.1 (26) |
| 6 | 調理師・コック | 2.1 (25) |
| 6 | 警察官 | 2.1 (25) |
| 8 | 医師 | 1.9 (23) |
| 9 | 芸能人(歌手・声優・お笑いタレントなど) | 1.7 (20) |
| 10 | 研究者・大学教員 | 1.6 (19) |
| 11 | 技術者・エンジニア・整備士 | 1.4 (17) |
| 11 | ゲームクリエイター・ゲームプログラマー | 1.4 (17) |
| 13 | コンピュータープログラマー・システムエンジニア | 1.3 (16) |
| 13 | 大工 | 1.3 (16) |
| 13 | 車の整備士・カーデザイナー | 1.3 (16) |
| 16 | 建築家・設計士 | 1.0 (12) |
| 17 | 薬剤師 | 0.8 (10) |
| 17 | バスケットボール選手 | 0.8 (10) |
| 17 | スポーツトレーナー・インストラクター | 0.8 (10) |
| 17 | パイロット | 0.8 (10) |
| 女子 | | % |
| 1 | 保育士・幼稚園の先生 | 11.6 (134) |
| 2 | 美容師・理容師 | 4.8 (55) |
| 3 | 看護師 | 4.4 (51) |
| 4 | ケーキ屋さん・パティシエ | 4.2 (48) |
| 5 | 薬剤師 | 3.2 (37) |
| 5 | 学校の先生 | 3.2 (37) |
| 5 | 芸能人(歌手・声優・お笑いタレントなど) | 3.2 (37) |
| 8 | マンガ家・イラストレーター | 3.1 (36) |
| 9 | ファッションデザイナー・デザイナー | 3.0 (34) |
| 10 | 介護福祉士・ホームヘルパー | 1.8 (21) |
| 11 | 医師 | 1.7 (19) |
| 12 | スポーツトレーナー・インストラクター | 1.1 (13) |
| 13 | サラリーマン | 1.0 (12) |
| 14 | 獣医師 | 0.8 (9) |
| 14 | 学芸員・司書 | 0.8 (9) |
| 14 | 音楽家(ピアニスト・バイオリニスト) | 0.8 (9) |
| 14 | ネイル・メイクアーティスト | 0.8 (9) |
| 14 | 公務員 | 0.8 (9) |
| 14 | 警察官 | 0.8 (9) |
| 14 | フライトアテンダント | 0.8 (9) |

注1) サンプル数は男子1,210名、女子1,151名。
注2) ()内は回答実数。

※『第4回学習基本調査・国内調査報告書・小学生版』参照。

次に、将来つきたい職業と成績の自己評価との関連を性別に整理したのが表2-2-11である。ここでは、中学生の「仕事」に対する興味・関心のありようを推測しつつ、独自に14種類のカテゴリに分類し直した結果を用いている(参照:村上龍『13歳のハローワーク』幻冬舎、2003)。「専門職」「管理職」「事務職」「販売職」「熟練」「非熟練」というような、通常社会学などの研究で採用される分類ではない。推測の域は出ないものの、中学生からみた「仕事の世界」を想定し、彼らが自身の将来像を思い描くときに何をコアにするのかという観点から14のカテゴリの作成を試みた。各カテゴリに含まれる主な職業は右の通りである。

おおまかな特徴を性別に示すと、男子については、①「医療」系、「規範」系は、成績の自己評価が上位>中位>下位となっており、自己評価ではあるが、成績と「希望する職業」が関連を持っていることがわかる。②「事務」系は、成績に関係なくほぼ7%前後、③男子でもっとも希望の多かった「スポーツ」系は、いずれの成績でも1割以上を占めるが、中位層の中学生がもっとも多く希望している。④「(希望する職業)なし」や「無記入」は、上位<中位<下位となっている。

一方、女子については、①「医療」系は、男子と同様に、上位>中位>下位、②「おしゃれ」系、「芸術」系はともに、上位層よりは下位層の中学生が多く希望している。③女子でもっとも希望の多かった「先生」系は、いずれの成績層でも15%以上を占めるが、男子の「スポーツ」系同様に、中位層で希望がもっとも多く、④「(希望する職業)なし」や「無記入」の比率は、男子に比べると少なくなり、また、成績の自己評価との関連がほとんどみられなくなっている。

〈職業についての14種類のカテゴリ〉

1. 医療：医師、看護師、薬剤師、医療技術者
2. おしゃれ：エステティシャン、ファッションデザイナー・デザイナー、ネイル・メイクアーティスト、美容師・理容師、フライトアテンダント、花屋さん
3. 規範：法律家、経営専門職、法務・経営関係、自衛官、警察官、消防士
4. 芸術：美術家、音楽家、小説家、ダンサー、タレント・芸能人、マンガ家・イラストレーター
5. ゲーム：ゲームクリエイター・ゲームプログラマー
6. 事務：会社員、銀行員、公務員(教育・警察等除く)
7. スポーツ：野球選手、サッカー選手、バスケットボール選手、スポーツトレーナー・インストラクター
8. 先生：学校の先生、保育士・幼稚園の先生、研究者・大学教員
9. 建物：建築家・設計士、インテリアコーディネーター、大工
10. 食べ物：栄養士、パン屋さん、ケーキ屋さん・パティシエ、調理師・コック
11. 動物：トリマー、獣医師、ペットショップ
12. 乗り物：鉄道運転士・車掌、パイロット、自動車製造・修理
13. エンジニア：技術者、コンピュータプログラマー
14. マスコミ：アナウンサー、テレビ・ラジオ局スタッフ、記者・編集者・ジャーナリスト

表2-2-11 将来つきたい職業(性別×成績の自己評価別)

| | | 男子 | | | 女子 | | |
|----|-------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| | | 上位 (425) | 中位 (242) | 下位 (513) | 上位 (403) | 中位 (230) | 下位 (487) |
| 1 | 医療 | 6.1 | 3.7 | 1.0 | 15.1 | 13.5 | 10.9 |
| 2 | おしゃれ | 0.0 | 0.4 | 1.6 | 7.9 | 10.0 | 10.5 |
| 3 | 規範 | 6.6 | 3.3 | 2.1 | 2.0 | 0.9 | 1.4 |
| 4 | 芸術 | 3.1 | 2.9 | 3.5 | 10.4 | 10.0 | 15.4 |
| 5 | ゲーム | 1.9 | 0.8 | 1.4 | 0.2 | 0.0 | 0.0 |
| 6 | 事務 | 7.8 | 6.6 | 7.6 | 3.7 | 0.4 | 2.3 |
| 7 | スポーツ | 13.9 | 19.8 | 13.3 | 2.5 | 1.7 | 2.5 |
| 8 | 先生 | 6.4 | 6.6 | 2.1 | 15.6 | 22.2 | 15.6 |
| 9 | 建物 | 2.6 | 3.7 | 3.5 | 0.2 | 0.0 | 0.4 |
| 10 | 食べ物 | 2.1 | 2.5 | 4.3 | 6.7 | 4.3 | 4.5 |
| 11 | 動物 | 0.9 | 0.8 | 0.4 | 1.7 | 1.3 | 3.3 |
| 12 | 乗り物 | 2.4 | 2.9 | 2.9 | 0.0 | 0.4 | 0.2 |
| 13 | エンジニア | 8.5 | 6.6 | 6.0 | 0.5 | 1.3 | 0.4 |
| 14 | マスコミ | 0.9 | 0.0 | 0.6 | 1.5 | 1.7 | 0.8 |
| 15 | その他 | 17.9 | 12.8 | 18.3 | 14.4 | 15.7 | 14.0 |
| | 未定 | 4.5 | 7.0 | 6.2 | 5.5 | 9.1 | 8.2 |
| | なし | 7.1 | 8.7 | 9.0 | 5.5 | 3.5 | 4.7 |
| | 無記入 | 7.5 | 10.7 | 16.2 | 6.5 | 3.9 | 4.9 |

注1) 1~14のカテゴリに分類するのが難しい職業は、「15 その他」に分類している。
注2) ()内はサンプル数。

5. 社会観・価値観

約8割の中学生が、勉強の効用を「社会で役に立つ人になるために」と回答している。小学生の回答率と比較すると、学歴主義的な社会観をより強く持っていることがわかる。しかし、「お金持ちになるために」という「経済的な成功」の手段として勉強をとらえる比率は他の項目よりも低く(49.3%)、これは小学生と同様の傾向である。成績の自己評価別にみても、上位層のほうが下位層よりも全体として勉強の効用を高く認める傾向がある。

中学生にとって、幸福をもたらす要因は、小学生同様に「いい友だち」である(92.5%)。時間選好に関する質問では、全体としては、「将来優先」「現在優先」において差異はないものの、成績の自己評価別では、上位層ほど、「将来優先」と回答する比率が高くなっている。

- Q | ●学校の勉強は、次のことにどのくらい役立つと思いますか。
 ●あなたは、次の意見をどう思いますか。
 ●あなたの考え方は、次のどちらに近いですか。

《学校の勉強の効用》

ここでは、まず、学校の勉強の効用についてたずねている。「役に立つ」(「とても役に立つ」+「まあ役に立つ」、以下同)の比率の高い順に整理すると図2-2-11のようになる。

まず、「社会で役に立つ人になるために」81.4%という回答率からは、勉強の効用を自分自身だけに結びつけるのではない志向を多くの中学生が持っていることがうかがえる。次に、7割台を示した「一流の会社に入るために」や「会社や役所に入ってえらくなる(出世する)ために」の回答からは、「職業的な成功や地位の達成」の手段として勉強の効用をとらえていることがわかる。小学生^{*}では「出世」を効用とする比率が他の項目と比較すると低くなっていた点(69.7%、8項目中2番目に少ない比率である)をふまえると、高校入試という、より現実的な目標が設定される中学校段階において学歴主義的な社会観が強まるといえる。逆に、内面の充足や実用的な側面に目が向いていた小学生^{*}と異なり、

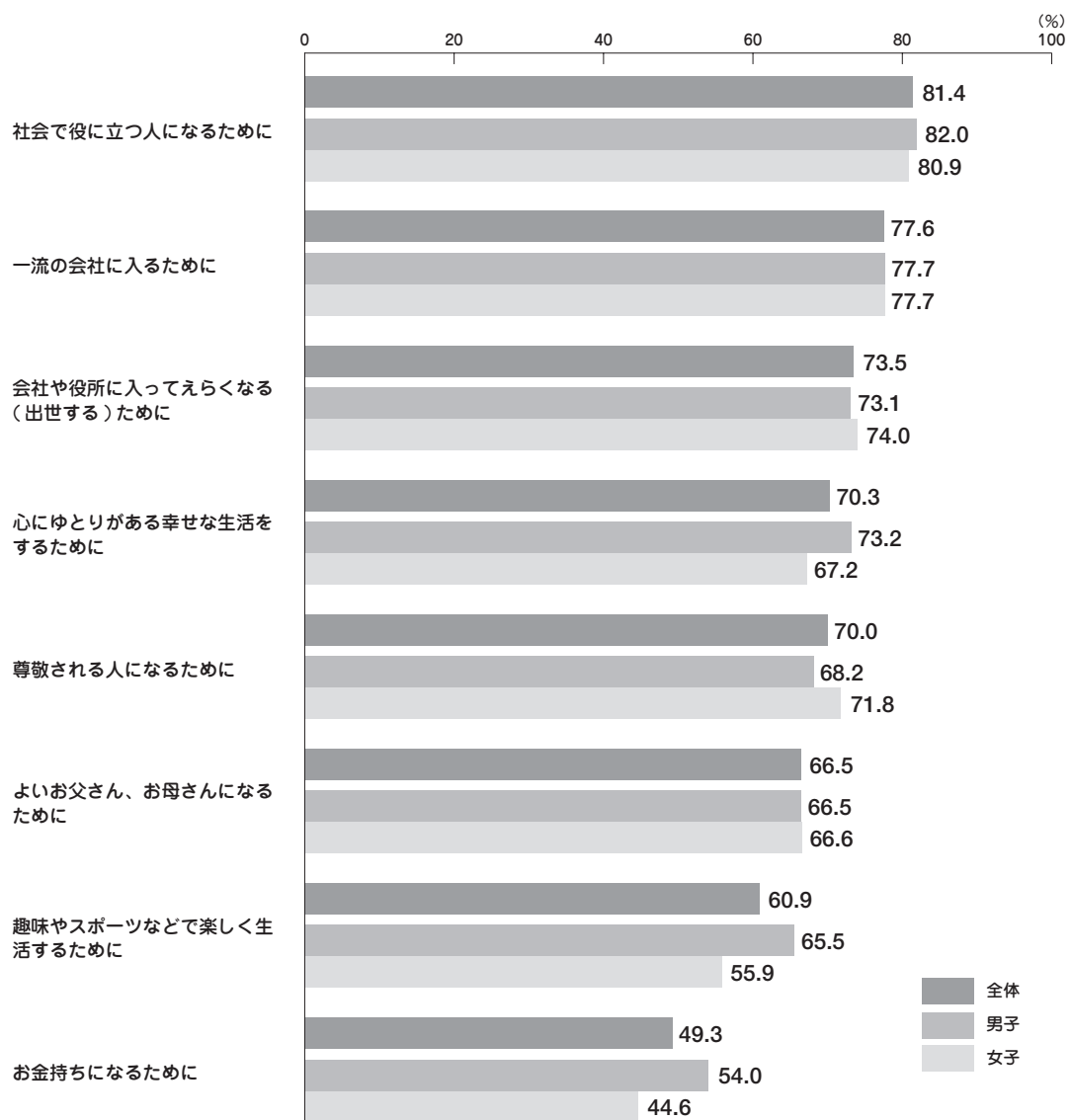
「心にゆとりがある幸せな生活をするために」「尊敬される人になるために」「よいお父さん、お母さんになるために」「趣味やスポーツなどで楽しく生活するために」は6割から7割となっている。「お金持ちになるために」(49.3%)という「経済的な成功」の手段としては勉強の有用性をとらえない傾向は、小学生^{*}(47.8%)と同様である。性別にみて男子のほうが比率が高い項目は「お金持ちになるために」(男子54.0%>女子44.6%、以下同)、「心にゆとりがある幸せな生活をするために」(73.2%>67.2%)、「趣味やスポーツなどで楽しく生活するために」(65.5%>55.9%)の3項目である。

成績の自己評価別にみても(図2-2-12)、上位層のほうが下位層よりも全体として勉強の効用を高く認める傾向がある。上位層と下位層の間で10ポイント前後の差があるのは、「一流の会社に入るために」(上位82.1%>下位72.5%、9.6ポイント差、以下同)、「お金持ちになるために」(53.6%>44.2%、9.4ポイント差)、「会社や役所に入ってえら

くなるために」(76.8%>68.5%、8.3ポイント差)の3項目であり、「職業的な成功、地位の達成、経済的成功」と勉強の効用を関連づける従来からの学歴主義的な社会観において、成績が強く関連していることがわかる。なお、図2-2-11の8項目の中でもっと

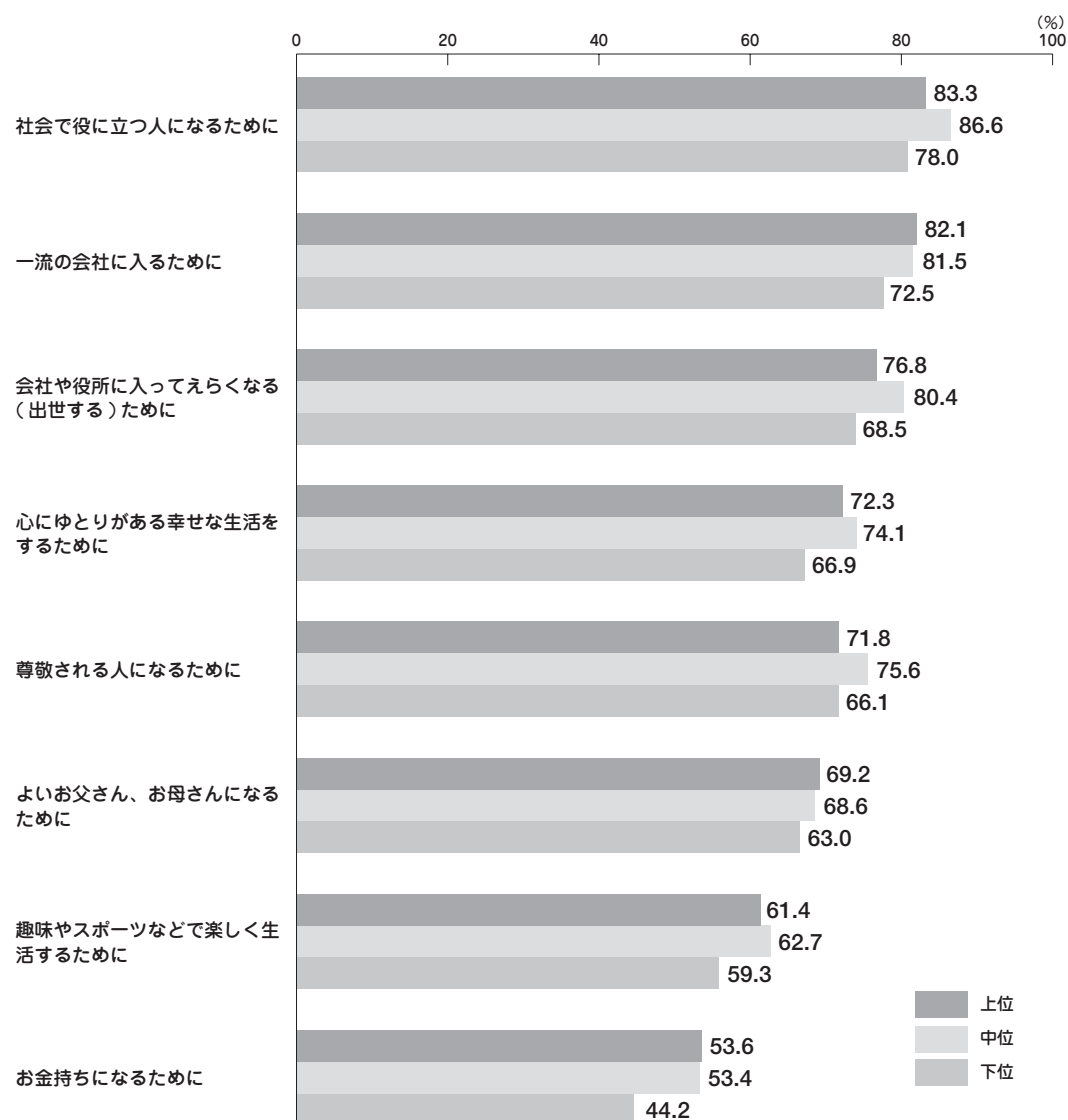
も回答率の低かった「お金持ちになるために」であっても49.3%を示したということは、少なくとも、2人に1人の中学生は勉強の効用として何かしら信じていると考えてよいのではないだろうか。

図2-2-11 勉強の効用(全体・性別)



注1) 数値は「とても役に立つ」と「まあ役に立つ」の合計。
 注2) サンプル数は全体2,371名、男子1,210名、女子1,151名。

図2-2-12 勉強の効用(成績の自己評価別)



注1) 数値は「とても役に立つ」と「まあ役に立つ」の合計。
 注2) サンプル数は上位828名、中位475名、下位1,006名。

《社会観・価値観》

表2-2-12は、社会観・価値観をたずねた8項目についての回答結果を「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計で示したものである。全体をみると、「いい友だち」が幸福をもたらすとほとんどの中学生が考えている(「いい友だちがいると幸せになれる」92.5%)。「お金がたくさんあると幸せになれる」(56.0%)や「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」(44.6%)を大きく上回っている。性別にみて10ポイント以上の差があるのは、「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」(男子50.7%>女子38.2%、以下同)、「お金がたくさんあると幸せになれる」(61.2%>50.7%)、「日本は、競争がはげしい社会だ」(70.3%>60.2%)、「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい」(55.7%>43.1%)の4項目である。「日本は、努力すればむくわれる社会だ」(57.0%>51.3%)を含めて考えると、業績主義的な社会観において、差が大きいことがわかる。

成績の自己評価別にみると、上位層と下位層の間で明確な差異があるのは、「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい」(上位60.3%>下位41.0%、19.3ポイント差、以下同)と、「日本は、競争がはげしい社会だ」(72.3%>60.3%、12.0ポイント差)の2項目である。日本が競争社会であり、学歴が意味を持つという意識のあり方が成績によって異なっている。しかし、「日本は、努力すればむくわれる社会だ」という項目については、上位層と下位層ではその差が5.3ポイントとなっており(上位56.9%>下位51.6%)、ここにあげた2項目ほどには、成績との関連が強くない。父親の学歴別では「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい」(大卒56.1%>非大卒45.7%、10.4ポイント差、以下同)、「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」(50.1%>41.0%、9.1ポイント差)、「日本は、競争がはげしい社会だ」(69.8%>

62.7%、7.1ポイント差)の3項目において、顕著な差異がみられた。

ジェンダー規範についてはどうだろう。「女子はそれほど勉強をがんばらなくてもいい」は「そう思う」17.4%、「数学は男子のほうが向いている」は21.5%となっており、全体としては、小学生^{*}の結果(「女子はそれほど勉強をがんばらなくてもいい」が14.2%、「算数は男子のほうが向いている」が29.4%)と同様に中学生においても規範にとらわれていないことがわかる。ただし、これらの結果を性別でみてみると、「女子はそれほど勉強をがんばらなくてもいい」については、女子のほうが「ぜんぜんそう思わない」の比率が10ポイント近く男子よりも多い(図表省略)。

成績の自己評価別では、下位層ほど「そう思う」傾向が強い。しかしながら、性別と「女子はそれほど勉強をがんばらなくてもいい」というジェンダー規範意識項目との関係を成績ごとにみると(表2-2-13)、上位層と中位層の女子で「ぜんぜんそう思わない」比率が高くなるが(上位:男子34.1%<女子51.6%、中位:男子28.5%<女子39.1%)、下位層の女子は、下位層の男子とほぼ同じである(男子29.4%-女子28.7%)。一定の成績以下になると、性別による影響がみられなくなる。

ジェンダー規範意識をたずねたもう1つの項目「数学は男子のほうが向いている」では、「そう思う」の比率に性別ではほとんど差異がないが、成績の自己評価別に「ぜんぜんそう思わない」をみると、上位42.0%に対して下位34.4%となっている(図表省略)。この意識項目と性別との関係を成績ごとにみると(表2-2-13)、上位:男子34.6%<女子49.9%、中位:男子33.1%<女子37.8%、下位:男子39.8%>女子29.2%となっている。上位層では、女子のほうが「数学は男子のほうが向いている」とは「ぜんぜんそう思わない」比率が高く、下位層では、男子のほうが

*『第4回学習基本調査・国内調査報告書・小学生版』参照。

「数学は男子のほうが向いている」とは「ぜんぜんそう思わない」比率が高くなっており、成績によって、男女の数学に対する考え方が明確に異なっていることがわかる。

《時間選好》

最後に、時間選好にかかわる項目「将来のためには、今やりたいことをがまんできる(以下、将来優先)」「将来のことはともかく、今が楽しければよい(以下、現在優先)」への回答結果を確認しておこう(図2-2-13)。全体としては、「将来優先」(45.4%)か

「現在優先」(47.2%)かでは、差異は認められない。また、性別にみても、男子で「将来優先」46.7%、「現在優先」44.5%、女子で「将来優先」44.0%、「現在優先」49.9%となっており、それほど明瞭な差異を示さない。

しかし、成績の自己評価別にみると、上位層では「将来優先」51.7%>「現在優先」40.8%に対して、下位層では「将来優先」39.5%<「現在優先」53.3%となっており、成績と時間選好の間に強い関連があることがわかる。

表2-2-12 社会観・価値観(時系列・性別・成績の自己評価別・父親の学歴別)

| | 第2回 (2,755) | 第4回 (2,371) | 第4回 (%) | | | | | | | |
|--------------------------|----------------|----------------|---------------|---------------|-------------|-------------|---------------|-------------|----------------|--|
| | | | 性別 | | 成績の自己評価別 | | | 父親の学歴別 | | |
| | | | 男子 (1,210) | 女子 (1,151) | 上位 (828) | 中位 (475) | 下位 (1,006) | 大卒 (876) | 非大卒 (1,459) | |
| いい友だちがいると幸せになれる | 89.3 | 92.5 | 92.7 | 92.4 | 94.6 | 92.0 | 91.0 | 93.9 | 91.6 | |
| 日本は、競争がはげしい社会だ | — | 65.4 | 70.3 | 60.2 | 72.3 | 65.5 | 60.3 | 69.8 | 62.7 | |
| お金がたくさんあると幸せになれる | 53.1 | 56.0 | 61.2 | 50.7 | 57.0 | 55.0 | 55.6 | 58.5 | 54.6 | |
| 日本は、努力すればむくわれる社会だ | — | 54.3 | 57.0 | 51.3 | 56.9 | 56.6 | 51.6 | 53.8 | 54.5 | |
| 将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい | 46.2 | 49.6 | 55.7 | 43.1 | 60.3 | 50.7 | 41.0 | 56.1 | 45.7 | |
| いい大学を卒業すると将来、幸せになれる | 44.6 | 44.6 | 50.7 | 38.2 | 46.3 | 44.4 | 43.5 | 50.1 | 41.0 | |
| 数学は男子のほうが向いている* | 24.3 | 21.5 | 20.3 | 22.8 | 19.3 | 20.4 | 23.5 | 20.3 | 22.1 | |
| 女子はそれほど勉強をがんばらなくてもいい | 17.0 | 17.4 | 20.6 | 14.2 | 12.0 | 16.6 | 22.5 | 16.6 | 17.7 | |

注1) 数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計。
 注2) —は該当項目なし。
 注3) *の第2回は「数学は男子のほうが、国語は女子のほうが向いている」。
 注4) ()内はサンプル数。

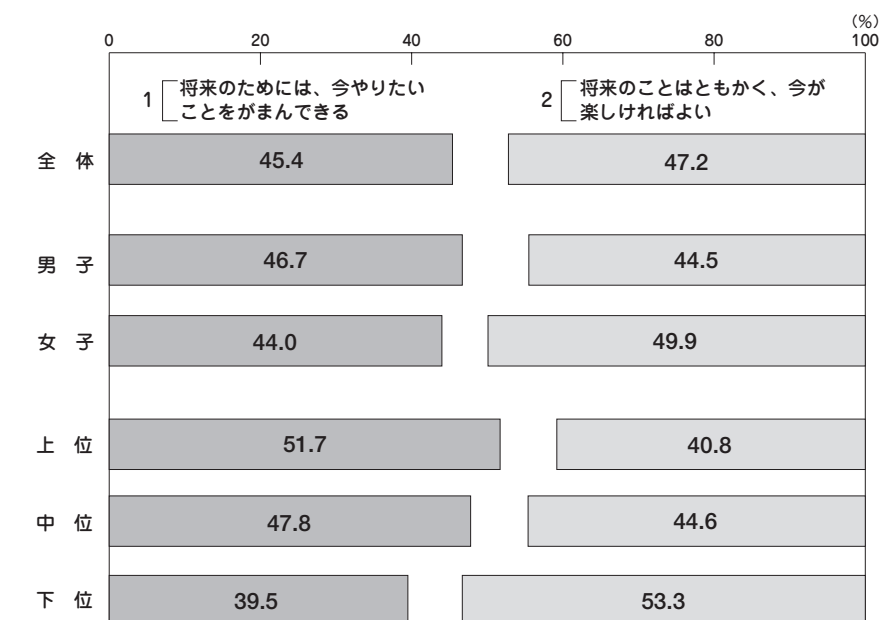
表2-2-13 ジェンダー規範(成績の自己評価別×性別)

| 〈女子はそれほど勉強をがんばらなくてもいい〉 (%) | | | |
|----------------------------|------------|------------|------------|
| | 上位 | 中位 | 下位 |
| 男子 | 34.1 (425) | 28.5 (242) | 29.4 (513) |
| 女子 | 51.6 (403) | 39.1 (230) | 28.7 (487) |

| 〈数学は男子のほうが向いている〉 (%) | | | |
|----------------------|------------|------------|------------|
| | 上位 | 中位 | 下位 |
| 男子 | 34.6 (425) | 33.1 (242) | 39.8 (513) |
| 女子 | 49.9 (403) | 37.8 (230) | 29.2 (487) |

注1) 数値は「ぜんぜんそう思わない」と回答した比率。
 注2) ()内はサンプル数。

図2-2-13 時間選好(全体・性別・成績の自己評価別)



注1) 「1」か「2」のいずれかを選択。数値は選択された比率を示す。「1」「2」の間の空白部分は、「無回答・不明」を示す。
 注2) サンプル数は全体2,371名、男子1,210名、女子1,151名、上位828名、中位475名、下位1,006名。

6. 部活動の参加状況

もっとも多いのは「運動部に入って積極的に参加している」の63.7%である。大きく差が開いているが、「文化部に入って積極的に参加している」の15.9%が続く。総じて、熱心に部活動に参加している中学生が多い。

Q | あなたはいま、部活動に入っていますか。

部活動に入っている中学生は、活動に多くの時間とエネルギーを費やしている。ここでは、中学生に部活動の参加状況をたずねた結果をみてみよう。

表2-2-14をみると、「入っていない」と「無回答・不明」を除いた、9割以上の中学生が部活動に加入していることがわかる。もっとも多いのは「運動部に入って積極的に参加している」の63.7%である。大きく差が開いているが、「文化部に入って積極的に参加している」の15.9%が続いている。

同じく表2-2-14で性別にみると、「運動部に入って積極的に参加している」では男子のほうが16.0ポイント多く（男子71.5%>女子55.5%）、「文化部に入って積極的に参加している」では女子のほうが21.7ポイント多い（女子27.0%>男子5.3%）。

また、部活動は地域によって活動状況が異なるが、地域別にみると、郡部では「入っていない」が0.5%と非常に少なく（大都市6.5%、地方都市7.3%）、部活動への加入率が高いことがうかがえる。p.42~45の「②学校外での学習時間」では、郡部において、学習時間に占める宿題の比率が高く、学習時間の伸びが著しいという結果が示された。ここでの部活動の参加状況も合わせると、郡部の中学生はとくに、放課後でも学校にかかわりの深い活動を多くしているという特徴が見い出される。

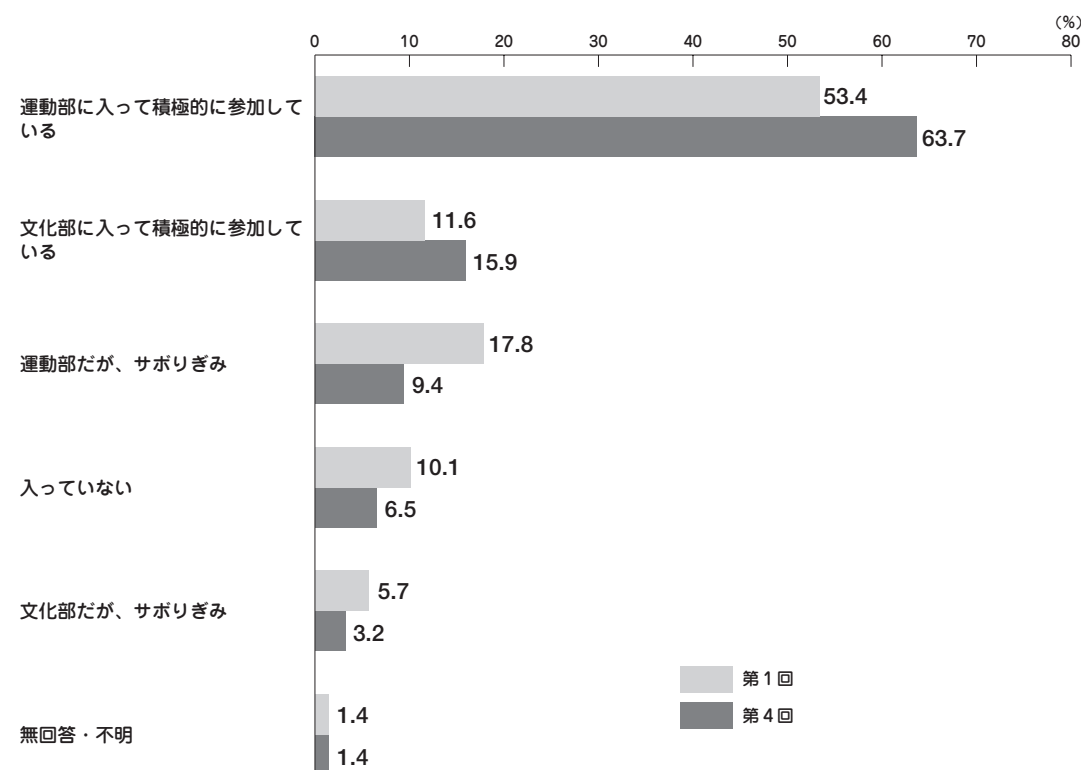
図2-2-14で第1回と比較してみると、「運動部に入って積極的に参加している」が53.4%から63.7%へと増加し、「運動部だが、サボりぎみ」が17.8%から9.4%へと減少の傾向にある。総じて、熱心に部活動に参加する中学生が多くなっている。

表2-2-14 部活動の参加状況（全体・性別・地域別）

| | 全体 (2,371) | 男子 (1,210) | 女子 (1,151) | 大都市 (716) | 地方都市 (822) | 郡部 (833) |
|-------------------|---------------|---------------|---------------|--------------|---------------|-------------|
| 運動部に入って積極的に参加している | 63.7 | 71.5 >> | 55.5 | 63.7 | 62.4 << | 73.6 |
| 運動部だが、サボりぎみ | 9.4 | 11.7 | 6.9 | 9.4 | 10.7 | 7.0 |
| 文化部に入って積極的に参加している | 15.9 | 5.3 << | 27.0 | 15.9 | 15.9 | 14.5 |
| 文化部だが、サボりぎみ | 3.2 | 2.0 | 4.4 | 3.2 | 2.3 | 3.6 |
| 入っていない | 6.5 | 7.9 | 5.0 | 6.5 | 7.3 > | 0.5 |
| 無回答・不明 | 1.4 | 1.6 | 1.2 | 1.4 | 1.3 | 0.8 |

注1) <>は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。
注2) ()内はサンプル数。

図2-2-14 部活動の参加状況（時系列）



注1) 第2回・第3回は該当項目なし。
注2) サンプル数は第1回2,544名、第4回2,371名。

7. 心や身体の疲れ

「あくびができる」(86.3%)、「だるい」(76.6%)、「朝、なかなか起きられない」(75.0%)、「目が疲れやすい」(71.8%)、「あきっぽい」(71.0%)、「いろいろする」(65.5%)と、ほとんどの中学生が疲労やストレスを感じている。

Q あなたはふだん、自分のからだについて、次のように感じることがありますか。

近年、子どもの体力が低下しているとか、食生活や睡眠などの生活習慣が乱れているということがよくいわれている。では、中学生自身は、ふだん自分のからだのことをどう感じているのだろうか。今回の調査では、第1回以来16年ぶりに、疲労感に焦点をあててからだのことをどう感じているかをたずねた。

はじめに図2-2-15から全体の傾向をみてみよう。「とてもそう」と「少しそう」の合計(以下同)の高い順にあげると、「あくびができる」(86.3%)、「だるい」(76.6%)、「朝、なかなか起きられない」(75.0%)、「目が疲れやすい」(71.8%)、「あきっぽい」(71.0%)、「いろいろする」(65.5%)となっている。ほとんどの中学生が「あくびができる」と感じており、もっとも少ない「いろいろする」でも3分の2の中学生がそう感じている。つまり、大半の中学生がからだのどこかに疲労やストレスを感じているのである。

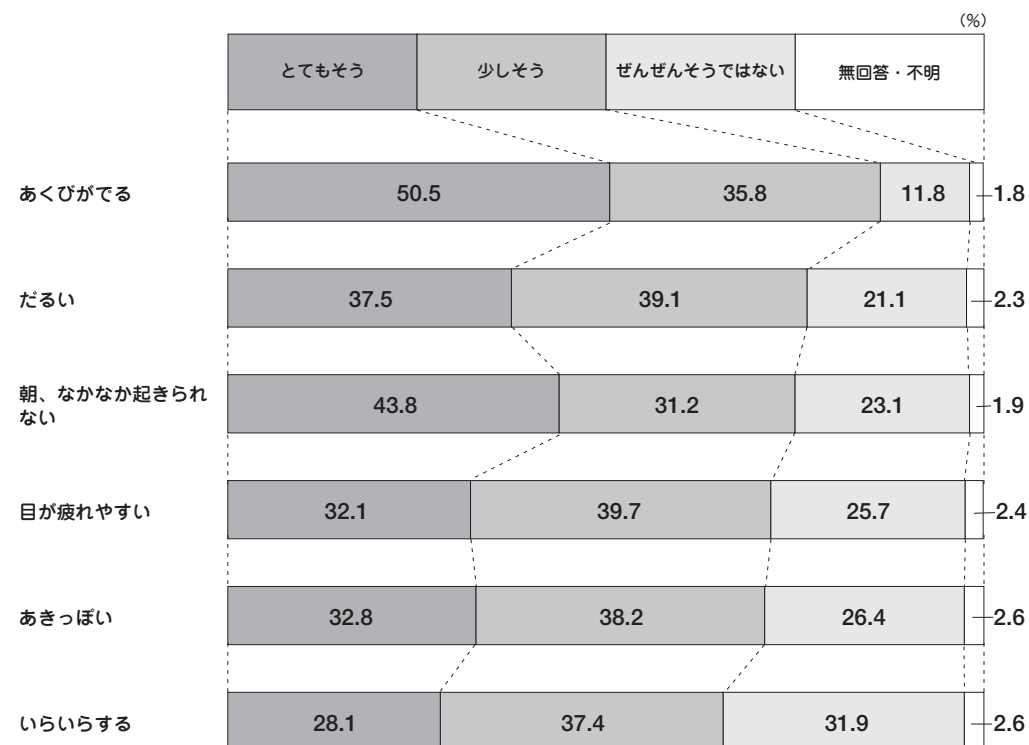
図表は省略するが、性別で違いがあるかどうかを分析したところ、たとえば「だるい」と感じているのは男子が72.0%で女子が81.4%だったほか、どの項目でも女子のほうが多く疲労やストレスを感じている。「3. 学習上の悩み」(p.82)でもそうであったように、思春期を迎えつつあるこの時期に、心身の悩

みやストレスは男子より女子のほうが強く感じていると考えられる。

次に、16年も間が空いているため、時系列的な変化とはいきれないが、図2-2-16から第1回と比較してみよう。とくに注目したいのは、「とてもそう」の比率である。「あきっぽい」は数ポイント減っているが、それ以外の項目では増加傾向がみられる。具体的には、「あくびができる」が38.8%から50.5%へ10ポイント以上増加したのをはじめ、「だるい」「いろいろする」で「とてもそう」が5ポイント以上増加している。微増ではあるが、「目が疲れやすい」も同様の傾向を示している。

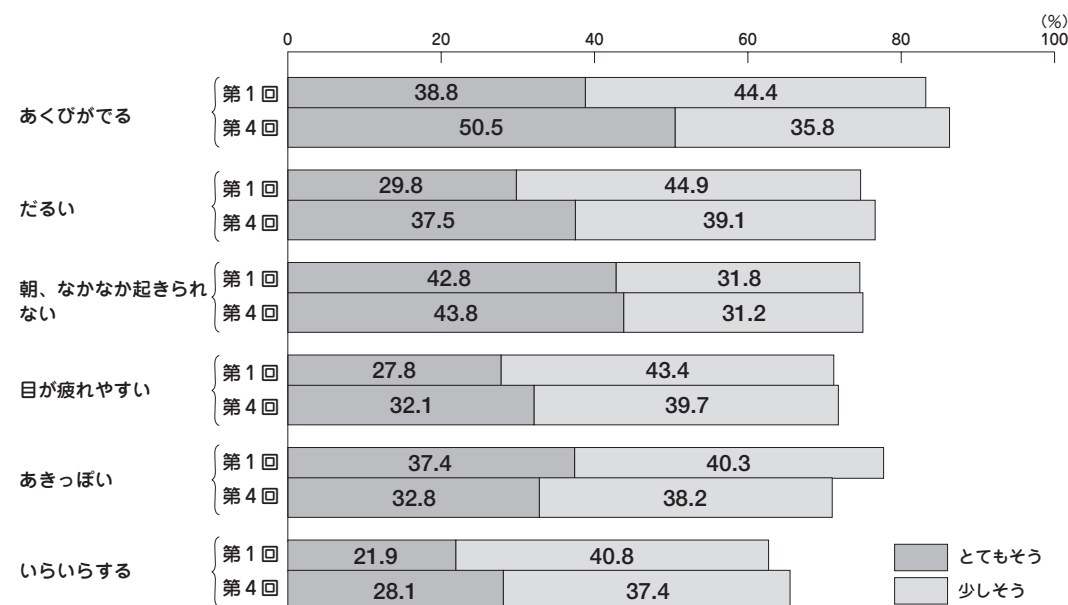
学校の制度としては、完全学校週5日制が導入されたり選択学習の幅が拡大されたりと、ゆとりある、中学生本位の学校生活が送れるようになったはずだが、実際には、学校での過ごし方を自分で選ばなくてはならなくなった。また、家庭生活でも、ファミレスやコンビニといった外食産業の充実やネット社会の普及などで便利になった一方で、外食をすることが増えたり深夜まで起きていることがあったりと、食生活や生活リズムが多様化してきた。このような中学生を取り巻く生活環境の変化の影響からか、主観的に“疲れた”中学生が増えている。

図2-2-15 心や身体の疲れ(全体)



注) サンプル数は2,371名。

図2-2-16 心や身体の疲れ(時系列)



注1) 第2回・第3回は該当項目なし。

注2) サンプル数は第1回2,544名、第4回2,371名。